星屑の使徒

紅丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
星屑の使徒

【Ｎコード】
Ｎ９４３０Ｇ

【作者名】
紅丸

【あらすじ】
「おもしろいなら」と、異世界に渡る事を受け入れた玲斗。予想通り世界は「おもしろい」方向へと進んで行く。個性の強いメンバーと共に進んで行く世界に、どのような展開が待っているのか。＞＞バトルなどの要素は希薄で、のほほんとした雰囲気の小説になります。＜＜作者ＢＬＯＧ更新中！ｈｔｔｐ：／／ｈｏｓｈｉｎｏｓｈｉ．ｃｏｃｏｌｏｇ－ｎｉｆｔｙ．ｃｏｍ／ｂｌｏｇ／

第０章～出会い編～　プロローグ

つまるところ、世界なんて　「　おもしろい　」　か、「　おもしろくない　」　かのどちらかなんだ。

だったら、俺は　「　おもしろい　」　方を選ぶ。

これまでだってそうであったように、これからだって同じ。

それでいいよな？　玲華（レイカ）・・・

世界は光と闇が争い続け、秩序と混沌は、入り混じる。

秩序と混沌の混ざった場所から、またあらたな光や闇が生まれる。

光は求めた　心に光ある物を

闇は求めた　心に闇ある物を

導きの星の光は

遠く空の彼方から降り注ぐ

世界創世記　１２章　４編より

「はぁぁぁぁぁあ・・・・・」

どよーん　と、音が聞こえてきそうな程の為息が聞こえる。

子供の頃から、幾度となく聞かされていた文言を見つめながら、シェスは重いため息をついていた。

瑞々しい緑のセミロングの髪を、耳にかけながら、オレンジ色の目をメンドクサそうに上げる。

視線の先には、クセのあるブロンドの髪、明度の高い水色の目の少年が、弱々しく不安げにこちらを伺っていた。

「シェスぅー、そんな重いため息つかれてもぉ・・・」

なぜウルウルするんだ、そこで　　と、シェスぅーじゃないシェスだ！と思いつつ

「何よバーツ。うるさいわねぇ。　これ、全部写本しなきゃいけないんでしょ？ため息も出るわよ。」

「自業自得だよね・・・」

しまったと思った時には、だいたい手遅れな場合が多い。まさに、今。

ピキッ！　っと音がした気がしたのは、バーツと呼ばれた少年だけじゃないはずだ。

「・・・・。」

「元はと言えば誰のせいでこんなこととしなく　はいへはうはっはほ・・・」

ウガー！！！っと突然大声になったシェスの口を、バーツが急いで塞いだ。いつもの事だ。
あの　ピキッ！　の後に来るパターンは大体知っている。

「ここ、図書館だから」

バーツは、シーと口の前で指を一本立てながらシェスに言う。
視線はキョロキョロと周りを見回していた。

心なしか、視線が痛い。　というか、確定的に痛い。
幼馴染のシェスは悪い子じゃない。むしろ、かなり良い子なんだ。

ただ、ちょっと元気が良すぎるだけなんだよ・・・。　ほんとだよ。。。

冷や汗を流しながら、バーツは心の中で誰かに言い訳をしていた。
ほんとだよ　の前に、何とも言えない間があった事については言及しないであげてほしい。

「だいたい、　あんたが魔法学実習のアイテムを採りに行けないって言うから、私が付き合ってあげる事にしたんじゃない。」

（いや、採りに行くの大変だなぁ　　が正解だと思うんだ・・・）

時は少し戻り、シェスがなぜ「世界創世記」12章からなる聖書を写本しているかという原因に遡る。

第1話　青銅の洞窟にて1

バーツは、心なしかいつもより元気をなくしたように歩いていた。

（よりによってなアイテムになっちゃったなぁ）

はぁ　とため息を吐きながら、自分のクジ運の悪さと、実習の内容をクジで決めてしまう自分の担任の大雑把…

大らかな性格を呪っていた。

実習。

魔法学実習とは…。有り体に言うと、進級試験である。

ここ、アスベール学院には、魔法課・戦士課・補助魔法課がある。

多かれ少なかれ大抵の人間が魔法を使えるが、何事にも得手不得手があるものだ。

学院では、その得手不得手を課で分け、得意分野を伸ばしつつ、一般教養を養う。

アスベール学院は、その中でも将来騎士もしくは、其れに準じる何かになるための学校である。

6年の就学期間中、かならず6回訪れる進級試験。それが実習である。

って、ボクは誰に説明してるんだ??と、現実逃避に失敗したバーツは、また肩を落とし歩いて行く。

「あれ、バーツじゃない！どうしたの、いつもにも増して暗いわよ?！」

元気いっぱいの声が後ろから後頭部にめがけて飛んでくる。
同級生で幼馴染のシェスだ。

「シェス…いや、今週末実習でしょ??嫌なクジひいちゃってさ…」

と、落ち気味の気持ちの理由を説明する。

「ジェリオット先生、大雑把すぎよね。普通、適正とかレベルとか先生が吟味してクエスト決めるでしょ?」

ジェリオット先生とは、我等が担任である。
魔法課の先生なのに、筋骨隆々。オレンジの短髪。目もオレンジ。
日に焼けた肌が眩しい独身３２歳男性だ。
顔立ちは整っているのに、奥さんがいないのは、性格が問題なんだろうな・・・。
と、想像しながらため息をつく。

「はぁ・・・。　あの先生に、選んでもらう方が怖いけどね・・・」

クエストとは、ここでは実習と同義ととってもらって問題ない。
実習の内容が　それぞれのレベルに合わせた採集クエストをクリアする事だから。
採集クエストとは、アイテムや素材なんかを集めるクエストだ。

「で、何をひいたのか教えてごらんなさいよ。」

「青銅の洞窟にいる　大青蜘蛛の糸だよ・・・。」

バーツは、思い出したくもない名前を告げる。

「じゃー、問題ないんじゃない??糸とってくるだけでしょ??」

「シェスは知ってるでしょ、　ボクが虫苦手だって・・・考えただけでも・・・」

どよーん　と、さらに暗くなる。もはや、背景は黒い影が覆ってしまっているようにも見える。

がっはっは　と、女性らしからぬ笑い声でシェスは笑った。

「あぁ、ね。　そういえばそうだったわね！それはご愁傷様ね。」

「あう・・・ま、まぁ、遭遇しないようにすればいいし、蜘蛛避けも持っていくからね。大変は大変だけど。」

精一杯の笑顔も、どこか引き攣ってしまっている。

よっぽど虫が苦手なのだろう。少し涙までたまっているようだ。

見るに見かねたシェスが

「手伝ってあげましょうか??」

「え?シェスも実習あるでしょ?」

「じゃーん!」

何を思ったのか、かばんの中から紙切れを引っ張り出してバーツに見せる。

そこにある文字を、バーツは目を細めて読んだ。

「うーんと・・・　青銅の洞窟　土鼠の尻尾・・・」

「そう。行き先一緒なのよ。手伝ってあげるわよ。」
鼻をフンっと鳴らすと、胸を張りながらシェスは言った。
「え・・・ほんとに??」
少し涙目のまま、多少上目遣いでシェスを見るバーツ。
た、立場逆じゃないっすかね・・・　すかね・・・　ね・・・・。
天の声は空しく響く。

2日後。青銅の洞窟の奥。

ピチャン
「はうあ!」
バーツは飛び上がる。
「何ビビってんのよ。　しっかし、いないわね。大青蜘蛛。」
「違うよ!!大青蜘蛛探してるんじゃないよ!」
いくぶん大きな声で、突っ込みを入れるバーツ。
シェスも分かっていてカラカッている。　と、思う。

「そうよね。巣探すのよね。　アハハハ。」
笑い声が少し乾いているのは仕様だ・・・仕様だ・・・。
バーツは心の中で繰り返した。
「しっかしいないもんね。」
「だね、そんなに珍しいモンスターでもないんだけど」
「大青蜘蛛、何かに食べられちゃったんじゃない？　ウッドスネークとか」
そのあたりにゴロゴロといるわけではないが、こういった洞窟には大青蜘蛛は群生しているはずだった。
大人の両腕を広げたほどの体の大きさから、見つけられないものでもない。
それが一匹も遭遇しないなんておかしい。しかも、巣がないなんて・・・
と、バーツは考える。
虫は嫌いだが、いてもらわなきゃ困る。　実習が終わらないからだ。
「そんな事言ってると、出てきちゃうかもよ。ウッドスネーク・・・」
「あはは、そうなのよねぇ。私って変な事言っちゃうと当たっちゃうのよね！」
カラカラと笑いながら、岩の後ろを覗き込んでいる。
ふと、シェスは動きを止める。

「バーーツーーー！」

「ん？どうしたの？」

「先に謝っとくね。　ごめん。」

冷たい汗が流れる。

「えっと・・・う、うん・・・　どうしたの」

「うーん・・・目が合ったの。」

「何と？」

「ウッドスネークと」

へっ？　と、バーツが言うか言わないかのタイミングで、目の前の岩の壁が　ボコッ　っと音を立てて崩れる。

飛び出してくる大蛇。

茶色いウロコの肌。ヌメッとした質感ではなく、枯れた木の肌のような質感。

大きさは、大の大人が両手を回したほど。

「「ぎゃー！！！！」」

ほぼ同時に悲鳴を上げ走り出す。

「なーんーでーー！！！！」

すでにバーツは涙をキラキラと散らしながら走っている。
シェスも、さすがに危険を感じつつ走って逃げる。

ズズズズズ

すぐ後ろには蛇が体を擦らせる音が聞こえている。
生きた心地がしない　って言うのは、こう言うことか！！！　と、
シェスは考えながら対策を考えていた。

「あーーもーー！埒があかない！」

「グスン　グスン、　なんでこーなるのーー・・・」

全力疾走で走りながら泣いているバーツ。

「よし、迎撃するわよ！！！」

「え！？」

「わたし、属性木と火が使えるから、火でどうにかする！　足止めできない？？」

「グスングスン、　で、できな・・・するよぉ」

途中でシェスが睨みを利かせ、出来ないと言おうとしたバーツの返答を無理やり変更させる。

「でも、ボク、属性水だよ・・・？あと多少治癒できるけど・・・」

「水よね・・・相性最悪ね。　でも、なんとかしなさい」

「はうあ・・・わかったよぉ・・・。知らないからね。なんとかしてね！！」

「わかってるわよ！」

腹をくくったバーツは、手のひらを上に翳しながら、口元で言葉を紡ぐ。

「水は集いて雪となる　雪は集いて雹となる　・・・・」

手の平の上に拳大の氷の塊が３つ出来上がる。

「アイスバレット！！」

最後のキーワードを高らかに叫ぶと、氷はウッドスネークめがけ飛んで行く。

狙うこともなく発射された氷の塊は、しかし２つがウッドスネークの鼻、目に命中し、動きを止めた。

シィィィアアアア！！！！

音とも悲鳴ともつかない蛇の絶叫が洞窟に響く。

暴れる蛇へ手の平を向けるシェスもまた、言葉を紡いだ。

「大きな太い枝が良い　真っ赤な炎を灯すため　先が尖った枝が良い　深く内より燃やす為！」

バーツの言葉よりも、倍近く長く紡ぐ。

言葉の長さが長ければ長いほど、強い魔法になる。

「ウッドスピア　オブ　レッド　！！」

先端が燃え盛る槍が飛んで行く。
混合属性魔法。通常のウッドスピアに火をともす。燃える槍とし、刺さった対象の肉体を内側から燃やす。

暴れているウッドスネークめがけ槍が飛ぶ。
いくら暴れていても、地面についた支点はそうそう動かない。
そこを狙ったシェス。　狙い通り槍がウッドスネークのウロコを突き破る。

ジィァァァァァァ！！！！

先ほどよりももだえ苦しむウッドスネーク。体を右に左にとぶつけ、悶える。
やがて、動きが遅くなり口からも炎が侵食している様を見てとる事が出来る。
動かなくなったウッドスネークの体は、表面こそあまり変化無い様に見えるが、外から見える体内は真っ黒に炭化していた。

「な、なんとかなるもんだね・・・」

「誰だと思ってるの。私を。」

「シェス・・・だったね。」

「当たり前じゃない。」

はぁはぁと肩で息をしながら二人は会話を交わした。

「でも、あんなロングスペルの魔法使えたんだね」

「ぶっつけ本番よ。」

「・・・・。」

冷や汗がを流すバーツ。　それでも、どうにかなった事に安堵の息を吐きながら岩に腰掛ける。

「たすかったよ、、、ありがとう」

「まぁ、もとわと言えば私がわるかｔｔ　　ッギァーーー！！！」

「はうあ！？」

座りながら返答を返していたシェスが突然悲鳴を上げて姿を消した。続けて腰掛けていた岩が傾き、地面が割れた。その穴に飲み込まれる二人。

「「ぎゃーーーーー」」

本日何度目かの悲鳴を上げて二人は洞窟の地下へと落ちて行った。

第2話　青銅の洞窟にて2

「あいたたたた・・・」

「いたーい！！！！」

二人は、暗い地下で目を覚ました。

「ねぇーシェスー！どこ？？」

「ここよー！」

真っ暗で何も見えない。ココとはどこだ　と思いながら　そうか、と思いついたようにバーツは短い言葉を紡ぐ。

「光よ」

短い言葉に反応し、掲げていたバーツの人差し指に光が灯る。

「あ、いたいた。　だいじょうぶ？？」

「大丈夫じゃない！痛い！　もう！何なのよ！！」

「ごめん、ボクの台詞盗らないで・・・」

「うぅ・・・」

自分のせいだという自覚があるのか、ないのか言葉を詰まらせる。

「ごめん、シェスのせいでもないよね。　ココどこだろうね・・・・」

珍しく神妙な面持ちで静かになったシェスの反応に、謝らなければならなかった。
もちろん、この状況はシェスの責任ではない。

「青銅の洞窟に地下なんてあったのね・・・」

若干、低い調子でシェスは呟く。
ボーっと光る指先を視線の先に向けながら

「ボクも知らなかったな。　これは大発見かもね！」

「見るからに遺跡って感じよね」

もともと青銅の洞窟は旧時代の遺跡である。
ロストと呼ばれる旧時代の発掘が１００年程前から行われている。
その過程で発見された洞窟を、土地ごとアスベール学院が買い取り、実習用クエストのフィールドとしている。
フィールドとは、このようなクエストの目的地となるダンジョンなどのことだ。
元々、発見された時点で主要な発掘品は国が引き上げ、空っぽになった洞窟を学院が所有している為、現在では、発掘は行われていない。
調べつくされた洞窟は、そのまま、Ｄ級以下のモンスターの巣となっていた。
先ほどのウッドスネークのようなＣ級モンスターは、ほぼ発見され

ていなかった。
しかし、やはり自然の状況と言うのは変わるものである。
ちなみに、大青蜘蛛は大きさにより異なるが　E～D級のモンスターだ。お目にかかっていないが。

「そうね・・・あ！あっち奥に続いてるわよ！」

遺跡・・・とは言え、ほぼ天然の洞窟である青銅の洞窟の壁は岩肌だ。
それに比べ、この場所の壁には、岩を切り出し積み上げた壁になっている。
滑らかとはいかないまでも、遺跡としか言えない場所であった。
シェスは、奥へ続く道を指差し歩いて行く。

「行ってみましょ！ほら、早く」

「えー、、危ないんじゃない？」

と、言いつつも好奇心には勝てずバーツも後を追う。

２００歩ほど歩いた先に、開けた部屋のような場所があった。

「あ、部屋っぽいところに出たわよ。」

「うん、、、何かの儀式場っぽいね、」

壁には、魔法陣らしきものが描かれている。
魔法陣とは、発声にて発言するには複雑かつ危険な魔法の類を、円

上に記号等を用いて記述する魔法の発現方法だ。
それが、入って右側の壁、左側の壁、正面の壁、天井、そして床に大きく黒い色彩で描かれている。
残念ながら、ロストの遺跡だと決定付けるように、文字は読み取る事が出来ない。

「読める・・・？」

「いや、ボクにも読めないね・・・。けっこうロストの本読んでるから部分的には分かるけど。」

「流石！本の虫！！」

「虫言うな・・・」

どうでもいいやり取りをしながら、バーツは描かれた魔法陣に顔を近づけ読める記号を探していく。

「うーーん・・・わかんないなぁ。何か召還するっぽいけど。」

「動かせないの？」

「キーが解らないよ。」

魔法陣は、記述しただけでは発動しないよう、特定のキーとなる要素を別に容易する。
陣に不足を作り、加筆して発動させたり、特定のキーワードを必要とする。
バーツには、この陣のキーが、キーワードなのか、加筆なのかもわからない。

「でも、すごいね。まだ陣に魔力が定着してる。よほど力のある術者だったんだろうね。」

「ふーん。」

シェスは、若干落ち着いていた。
ロストの中には宝石なども含まれ、かなりの高値で売買される。
国に報告した場合でも、学術的資料でない場合、宝石の類は発見者へ譲渡される。
この遺跡にあったのは、魔法陣のみ。
金銭的価値は、この時点では認められない。
本の虫と呼ばれたバーツは、その通り、知的好奇心に旺盛である。
それこそ、ふだんのオドオドした態度は、好奇心の前に息を潜めている。

「バーツ　戻って報告しよーよ。」

シェスは詰まらなさそうに、バーツを帰途へと呼ぶ。
少なくとも、この遺跡の報告をすれば、二人とも実習は合格となるだろう。
どうでもいいようなクエストに比べたら、ここの発見はあまりにも素晴らしい。
単位など、当たり前でSランクの成績で合格だろう。

「うーーん、もうちょっとーー」

「もうっ！」

この状態に入ったバーツは、シェスにすら止められなかった。

しかたないなぁ　と、諦め半分で返事をする。
クスクスと笑いながら、シェスはバースの背中を眺めていた。

１０分後・・・

「まだ？」

「あとちょっとでキーが何かくらいは解りそうなんだ」

「知ってどうすんのよ。　国の機関が研究内容を発表してくれるでしょうに」

「そうなんだけど・・・　あっそうか、」

「もう・・・」

これは、解るようになるまでエンドレス・・・とシェスはため息をついた。
ふと、壁に出っ張りがあるのを発見した。
左右の壁に一つずつ。

なんだろう・・・

押してはだめ！　　と言われると、押したくなる。
明けてはだめ！　　と言われると、明けたくなる。
これは、人間の性でしょうか。

「えい！」

壁のブロック一個分の出っ張り。掌サイズほどのソレを押し込む。
反応はない。

「なーんだ、なんも起こらないじゃない。　つまんないのー」

何か起こった場合の事を、起こる前に考えられない人って意外と多いようで、
シェスは、まさにその典型のような性格だ。

「ふーーー難しいな・・・複雑すぎだよ。で、そこで何してるの？」

「い、いや、何もしてないわよ！」

ビクッ　と反応してしまった。
何も起こらなかったとは言え、本当の事を言ってしまえば怒られてしまうに違いない。
蛇足はしないに限る。
シェスは、一瞬言葉につまったものの、返事を返す。

「そっか。　おかしいんだ。この陣、欠けてる部分がないんだ。」

「どういうこと？」

「発動しなかったのか、今も発動中か・・・かな」

「何も起こってないわよねぇ～　見かけ倒しなんて・・・」

「まぁ、どうだか解らないから　触らない方がいいね。」

「そうね」

ふーっとずっと陣と睨めっこしていたバーツは、うぅん　と背伸びをしながらシェスと反対の壁まで歩いて行く。
程よい場所に四角く切られた石が置いてあったため、そこに腰掛けようと思ったのだ。
程よい高さに、陣もなく置かれているため、　トスンッ　と腰を掛ける。

シェスは反対側の壁にもたれたまま、少し休憩している幼馴染を待つことにした。

もう一度　ふぅー　と息をつくと、バーツは壁にもたれかかった。
もたれた場所が悪かった。

飛び出ていた石に気付かず、不可抗力ではあるが石を押し込んでしまったのである。

するとどうだろう、陣から淡い光が立ち昇り出したかと思うと、かるく地震が発生する。

「うあ・・・なんだ」

「キャっ！　　な、何したの！？」

「わかんないよぉ～！」

「その辺、石出っ張ってなかった？？」

「え・・・　　それで陣を途切れさせてたの・・・かな・・・？」

「もう！バカ！　どうすんのよ！」

「わかんないよぉ～！　どうしよう！」

そんなやり取りをしているうちに、地震が収まっていく。
やはり、不発だったのだろうか　と、バーツが思っていた矢先

ピカッ！！！！

陣が強い光を放つ。　目を開けていられなくなった二人は、目を腕で覆い瞼も硬く閉じた。

次第に弱まっていく光。

爆発や、それに順ずるその他の現象が無く、　無事である事を確信したバーツは、目の前の光景を疑った。

黒髪で、黒い服装をした・・・　男性・・・？だろうか

とにかく、上から下まで真っ黒な人間が横たわっていた。

第3話　始まりの出会い

普段通り、俺は学校からの帰り道を歩いていた。
ここ1年ほど、何も変わっちゃいない。
ごらんの通り身長が185cmくらいある以外は、いたって普通の高校生。
特徴もなくて・・・いや、特徴はあるだろうか。周りの人たちが避けて通る程に目つきが悪い。
生まれつきだから・・・。

「キャッ」

ほら。
正面から歩いてきた女子高生が、ちょっとした悲鳴を上げて避けて行った。

「はぁ・・・」

そりゃ、ため息も出てくる。
至って普通。　そんな、ちょっと当たったくらいじゃ怒ったりとかしないかから。
大体、町を歩いているとこんな感じだ。

こんな時に、ふと思い出す。
いつでも、隣を楽しそうに付いてきていた。
俺がどんなにビビられて、あたかも不良を見る目で見られていても。
玲華・・・
俺の妹。

ある日、突然、妹はこの世を去った・・・。
ちょっとしたニュースにもなったんだ。
女子高生通り魔事件。
未だ解決しない。俺の心に闇を作った出来事だ。

一つだけ残された手がかりが、犯人の左腕の刺青。
左手首内側に、黒い竜の彫り物があると言う事。
妹が最後に見た、唯一の手がかりだった。

妹は、何の屈託もなく笑う奴だった。
目つきの悪い俺だが、玲華を見ていると自然と笑顔になれる気がした。
玲華の口癖だった。

『一度キリの人生でしょ？だから、私は少しでも楽しく生きていくんだぁ♪』

まさか、自分の一度キリの人生が、あんなに早く終わってしまうとは思っていなかっただろう。
なぁ、玲華。　お前は、人生楽しめたか??

一人で考え事をしながら歩いていると、家路はあっと言う間だった。
たどり着いた家はボロアパート。

「ただいま」

誰もいない部屋に一人で帰ってくる。
1年も続ければ、そう寂しさを感じる事はなかった。

もともと、家族と呼べる人間は、妹しかいなかった。
早くに両親を亡くした俺達は、それぞれ親戚の家に預けられる事となった。
しかし、いくら親戚と言えど、二人同時に育ててくれる親切な者などなかった。
俺が小学校5年。妹が小学校4年の冬だった。
雪の降る寒い冬だった。

どうしたんだ。俺。　昔の事ばかり・・・

しばらく寝よう。

そう思い、万年床1年生の布団に横になる。

「ふぅ、、、」

目を閉じ、1分くらいだろうか。
まだ、眠りにもつけていない。
それなのに、体がフワフワと浮いているような感覚に襲われ、急いで目を開ける。

否。

それは、感覚ではなく実際に浮いていた。

「な、なんだよ！　夢なのか！？」

喚いても、地面に降りられない。
夢かと思い、結構な力を入れて頬をつねってみた。

「痛いんだな、これが。」

マジですか。。　と、一人ごちる。
いつから、俺の体は空中に浮かぶほど軽くなったんだろう。　デカいのに。
などと考えていると、今度はどんどんと上へ昇っていく。

天井にぶつかる！！

と、思い、目をつむったが、襲ってくる浮遊感意外の衝撃はやってこない。
目を開けたら、天井も越え、屋根も越えていた。

「いや、誰か気付こう??　おーい、俺、空飛んでますよーー！！」

力一杯、叫んではみたが、通りを歩く人、一人も気付かない。
それどころか、飛んできた鳥にまで無視される始末だ。

「あれか！俺死んだっぽいか??」

（ふふふ。貴方は死んでなどいませんよ。）

直接声が頭に響いてきた。

「誰だ！?」

（私は希望。私は答え。私は全て。）

「言ってる意味と、頭に声が響いてる意味がわからんぞ！！」

（貴方は、面白い人。　白で黒。光で闇。炎で氷。本当に面白い人。）

ふふふ　と、笑いながら、声の主は続ける。

（貴方は世界に愛されてしまいました。）

「あぁ、さようか。告白して頂いてるところ悪いんだが、俺を帰してくれんだろうか」

（それは、もう出来ません。　肉体はこの世界に。魂はヴォルトに引かれしまっています。）

「・・・？？　いや、わからんが、それは死んでるのとは違うのか？」

（確かに、この世界では、死を迎えた事になります。）

「なぁんでさ！あれか、デスノ〇ト的なあれか！」（心臓麻痺と言いたいらしい）

（よくわかりませんが、魂は死んでおりませんから、貴方がたが天国と呼ぶ場所には行けません。）

「ちょ・・・まぢでか。　てか、本格的に死んだっぽいな・・・」

この間も、空をどんどんと上っていき、大気圏をゆるいスピードで越えると言う

ニュートンもビックリな荒業を成し遂げている。

（それでは参りましょう。ヴォルトへ。私達の世界。もう一つの可能性。）

「どこよ、　なんつーか、もう聞いても無駄っぽいな・・・」

（・　・　・　。）

「一つ聞いていいか？」

（何でしょう？）

「そこは、面白いところか？」

（貴方次第です。　ただ私達が望む事は、貴方らしくあって欲しいと言う事。）

「なんだかよくわからんが、楽しめるんだな？　ならいい。煮るなり焼くなりしてくれ！」

と、大の字に両手両足を広げた。

（ふふふ。　あぁ、愛しい子よ。私達の落とし子。星の使途。さぁ、いざ参らん）

声の主がそう告げると同時に、光につつまれた。あまりの眩しさと、光の後の落下感で俺は意識を手放す事になった。

「ね、ねぇ。シェス・・・」

「なによ・・・。」

「これは、人間を召還してしまったと言うことなのかな・・・」

「そもそも、これは人間なの？　見た目は真っ黒い・・・人間よね。」

二人は、目の前の現象が信じられなかった。

「うん。顔は白いけどね。　眠ってるのかな？」

何故驚いているのか。
それは、生きた人間は召還することが出来ないからだ。
通常召還で呼び出されるものは、魔力によって寝られた火や氷や雷、風など協力な魔法。
それと、精霊と呼ばれる肉体を持たない者達。
どこぞの術者は、悪魔なんてのも呼ぶらしい。この国では禁術とされているが。
とにかく、召還されるものは、肉体を持たないばかりか、物体ですらない。
それが不可能な理由については、諸事あるが、

一番は、召還後の再構築が出来ないと言う点である。
つまり、どう言う事かと言うと、召還で呼び出された物体は、原型を留めないのだ。
かたや砂のような物に。方や裏返った液体のような物に。
言葉に出来ないような形になる場合もある。

それがどうだ。
目の前の人間「らしき」ものは、形を留めている。
完璧な召還であった。
中身はどうだかはわからないにしても、呼吸をしている事を考えると重大な障害は発生していないと見える。

「なんてことだ・・・このまま目を覚まさなかったらどうしよう・・・」

バーツは、自分のせいで人一人が、死んでしまうかもしれない可能性に震えた。

「だ、大丈夫でしょ・・・？やたら気持ちよさそうに寝てるし・・・」

「だけど・・・。」

「だったら、学園まで連れて帰りましょうか？」

「そう・・・だね。　このまま置いておくわけにもいかないし・・・。」

提案者であるシェスは、いっさい手伝わず

なぜか（当然と言うべきか）バーツが一人で担いで学校まで連れて帰った事は
特筆すべき点ではないだろう。

第4話　姉と・・・ペナルティと・・・

バーツ達は、アスベール学院まで黒尽くめの男を運んだ。
実習中という事もあり、殆どの生徒は学院の外に出ている。
ある意味、好機と言えば好機。あーだこーだと奇異の目線に耐えなくてすむから。
バーツは、そんな目線に耐えられない程に疲れきっていた。
ウッドスネークとの戦闘、青銅の洞窟地下遺跡、そしてこの人間を運んできた為に。

「ゼェゼェ。。。　と、とりあえず　ハァハァ。。。　医務室かな??」

息も絶え絶えだ。
力仕事だとか、剣術とか、体を使った事が苦手だから魔法課なのに・・・
と、心の中では誰かに訴えているが、誰にもその声は届かない。

「そうね。とりあえず医務室に運びましょう。運んでおいて、ジェリオット先生に報告ね。」

「わはった・・・」

もう、バーツは喋れているのかいないのかの判断もついていない。
それでも、シェスに手伝ってなどと言えるわけもなく、どうしたものかこの一時間考えていたが、結局今の状態である。

―医務室―

「あぁらァ。珍しいじゃなぁい？二人がココに来るなんてぇ～」

「はうあ・・・」

バーツは忘れていた。

「デリアさん！お久しぶりでーす！」

「お久しぶりぃネェ。」

「ちょ・・・それより、この人・・・」

デリアと呼ばれた、ゆるくウェーブのかかったブロンドの髪を紐で纏めながら、妖艶な色香のある少し垂れ目がかった金色の眼差しで、黒尽くめの男を捕らえた。

「あらあら。。。良い男ねぇ～。それお姉ちゃんにくれるの？？」

あはぁ～！　などと言いながらバーツに近づく。

「姉さん。この人、病人。ここ、医務室。姉さんは、医務教師。」

そうだったわねぇ～　などと言いながら黒尽くめの男を受け取っているデリアは、バーツの姉である。

医務室とは、治癒系の魔法で病気になった者や、怪我をした者を治癒などしてくれる場所である。

光の加護を持つ彼女は、治癒を最も得意とするヒーラーなのだ。

本人曰く　『体も、心も癒すわよぉ～』　だそうだ。

おかげで、常時男子生徒が保健室に屯している。

「何かのショックで気を失ってるみたいねェ～」

言葉を紡がずに手の平に光をともして、男の額に手を当てたデリアが言った。

無言(むげん)発動は、上級の魔法の発動方法だ。

触れた者の状態を読み取る魔法を行使したデリアは、　心配ないわよぉ～　と良いながら定位置である椅子に座る。

医務室には、ベッドが3台、机・椅子が一つずつ。

なにやら怪しげな液体で動物を浸したもの、淡く発光する液体、白い粉末などが置いてある薬棚がある。

奔放な性格のようなデリアであるが、部屋は意外と整然としている。

「そう・・・お姉ちゃん、しばらくその人預かっておいて。僕は先生に報告に行ってくるよ。」

「デリアさんまたねぇ～！」

手をヒラヒラと振りながら医務室を出て行く二人。もとい。手を振っているのはシェスだけだが。

バーツは、一刻も早くこの場を去りたいようで、急ぎ足で去って行った。

「釣れない子ねぇ、ほんと。　しかし・・・この男の子。珍しいもの持ってるじゃなぁい？　お姉さん手ぇ出さない自信無くしちゃいそうだわぁ～」

熱っぽい台詞と声音の割りに、表情は厳しく、ベッドを見つめるデリア。

ふぅ　と息を吐くと、机に向かい書類を記入し出した。
書類の文頭には、『　緊急報告事項　』　と記されていた。

ー職員室ー

「と、言うわけです・・・。」

シェスとバーツは、職員室に入るとジェリオットを探した。
探すまでもなく、特異な雰囲気を醸し出している件の先生はすぐに見つかった。
見つけざまにバーツは頭を抱えてしまった。その理由はジェリオットの行動である。

音楽の譜面台に、魔法書を置き、右手に何やら発光する液体を持ちながら、左手で鉄の塊を上げ下ろししている。

「な、なにやってｒ・・・」

「おぉ～！バーツ。それにシェスも。　お前ら青銅の洞窟でのクエストは終わったのか？」

当たり前のような返答に、このおかしな行動は突っ込んではイケないんだなと悟る。
説明している間も、視線こそ魔法書からコチラへ向いてはいるものの、両手の所作は変わらなかった。
正直、気が散ると言うか、なんと言うか・・・

「なるほどな。それじゃ、先生が遺跡の発見報告などはしといてやる。」

「「お願いします。」」

「その召還されたらしい男は、目が覚める頃に俺も会いに行くから。」

「「はい。」」

「あ、そうそう。とりあえずクエスト途中棄権って事で、聖書の写本をしてもらっておこうか。」

え？　っと言うそばから、ジェリオットは聖書を　ほれ　と言いながら二人に渡す。

クエストは完了出来なかったが、まさか、その点を言及されるとは思っていなかった。

むしろ、お褒めの言葉すら期待していたのだから、この時の頭は状況を理解しかねていた。

「まぁ、大発見もあったから、今回はコレで実習クリアって事にしてやる。ただ、クエストの放棄、青銅の洞窟の破壊。未知の魔法陣の発動。あまり褒められたもんじゃないからな。」

二人は言葉を失う。もっともな話だ。しかし、こちらにも言い分はある。

「で、でも！ウッドスネークが出てきてしかたなく迎撃したのが事の発端なんですけど・・・」

シェスは抗議する。

「あぁ。しかし、あの狭い洞窟内でロングスペルの大威力魔法はマズいぞ。木蛇に当たってなくても同じような結果になっていたか？」

「それは・・・。」

「実習は合格で、成績上はクエストクリアって事にしといてやるから、今回の事はその聖書でチャラって事でいいだろ？」

「「はい・・・。」」

二人は渋々ではあるが、了承の意を示す。

重たい聖書・・・　１２章各５編　からなる分厚い本を抱え、意気消沈の体で職員室を後にする。

「これで、しばらくは誰かに喋る事もないか・・・。このタイミングで召還たぁ、世の中上手いのか下手なのか・・・。」

そう呟きながら、ジェリオットは席を立つ。

向かった先は、職員室と隣接している理事長室。

アスベール学院の最高責任者の下へ。

―図書館―

「だいたい、　あんたが魔法学実習のアイテムを採りに行けないって言うから、私が付き合ってあげる事にしたんじゃない。」

（いや、採りに行くの大変だなぁ　　が正解だと思うんだ・・・）

盛大にため息をつきながら、シェスはそれでもカリカリと写本を続けている。

雑念を盛大に持ちながら聖書を写本する事は、正直どうなのか

などとバーツも思いつつ、自分は自分で、発見した遺跡の事を考えている。

（人体召還・・・）

目の前で起こった、考えられない出来事。

前述した通り、質量の存在する「物体」は、今の魔法学の技術では不可能である。

ロストと呼ばれる旧時代の遺跡から発見されるモノや、術式には、現在の技術では不可能な事を可能にする可能性を秘めたものが多くある。

今ある魔法の技術、系統の区分、属性や加護。

そういった知識についても、ロストから読み解き、現代へと広められた知識である。

魔法の技術の発展は、人々の生活を豊かにするだけでなく、争いも呼び込む事となったが。

（不可能を可能にするロスト・・・か。）

ロストについて、人々が口にする文言を思い浮かべる。

「バーツ。　そろそろ、召還された男の人、目覚めたんじゃないかな？？」

シェスが唐突にバーツへと問いかける。
正直、今の作業に飽きているだけだろう・・・。

「かな。　まぁ、姉さんもいるし、問題ないんじゃない？」

「何言ってるの！第一発見者の私たちが立ち会わなくて、誰が立ち会うって言うの！？」

「発見者じゃなくて、召還者・・・だけどね。」

「どっちでもいいの！　ほら、行くわよ！」

シェスは、早々に本やノートを片付けると、バーツを急かすように足早に去っていく。

「ちょ、ちょっとまってよ・・・　はぁ・・・。」

シェスには勝てない。
もう、これは何年もの間続いてきた事だ。
バーツは諦めるように自分の荷物を片付けると、シェスの後を追って行った。

第5話　ファンタ・・・じー??

ー医務室ー

バーン！
医務室のドアが勢い良く開かれる。

「デリアさぁん！黒い人起きました??」

シェスが入るなりの勢いで、大声でデリアに問う。

医務室だからぁ～　　と、バーツも続いて入ってくる。
ふと、二人の視線はデリアの横で驚いた顔をしている男性に止まる。

「レイト　　アマカワって言うらしいわよぉ～」

唐突にデリアが甘い声で紹介する。
ど、どうも…と言いながらレイトは頭を下げる。
目線を二人に戻す。

「玲斗。天川　玲斗。苗字が天川だから、玲斗　　天川かな…。よろしく。」

「ひっ！」

何故か悲鳴を上げ、半歩下がりシェスの後ろに隠れるバーツ。
玲斗は小首を傾げ、何やら考え込んでしまった。

「あ・・・あぁ・・・すまない。初対面の人をいつも怖がらせてし

まう。」

「い、いえ・・・」

幾分小さくなるバーツの声。

「なぁにビビってんのよ、バーツ。失礼よ？寝てるこの人担いで来たでしょう！確かに少し目つき悪いけどね！」

はっはっは　と、女の子らしからぬ声で笑いながら、バーツの背中をバシバシ叩くシェス。

何気に自分も失礼な事を言っている事に気付いていない様子だ。

「担いで？？」

「この二人がここまで貴方を運んで来てくれたのよぉ～」

「ま、まぁ。」

デリアが手の平でバーツとシェスの方を指しながら、説明をする。

運んで来たのは事実だが、召喚によって事故とは言え呼び出した相手だ。返答に詰まりつつも答える。

一方、玲斗は

「え・・・それは、有り難う。申し訳なかったです。重かったろ？」

そう、恩人に対しお礼をする。

「ハハ、まぁ。　軽くはなかったわよね！」

「シェスは担いでないけどね・・・。」
軽口を叩くシェスに対し、バーツはすかさず突っ込みを入れる。
いつものペースにもどりつつあるバーツが、はっ　した顔をした。
「あ、自己紹介まだだったよね。僕はバーツ。バーツ＝ハント。バーツって呼んで。」
「あたしは、シェス。シェス＝コナー　よ。シェスで良いわ。」
「宜しく。バーツとシェス。」
「よ、よろしく。」
「よろしくね！」
「アタイは、デリア＝ハントよぉ～。バーツのお姉ちゃんでぇ～す！」
流れに置いて行かれると思ったかどうかは解らないが、すかさずデリアも自己紹介をする。
ハハ　と、乾いた笑いを禁じれないバーツ。律儀にも、玲斗は返答を返す。
「おぉ。姉妹なんですか。そう言えば、よく似てますね。でも、目の色は違うんですね？」
「あぁ、コレねぇ～アタイは光の加護持ちだからさぁ。バーツは水の属性色が出てるのよねぇ」

聞きなれない言葉に、玲斗の頭にはハテナマークが飛び出てくる勢いで、首を傾げる。

「うーんと、加護・・・？属性・・・？」

「あらぁ、レイトちゃん、加護持ちとか属性とか知らないのかなぁ？？」

この世界の常識になっている、加護持ちや属性について。
しかし、玲斗には何の事かわからなかった。
「レイトちゃん」と呼ばれた事にも気付かないくらいに。

「そ、、それ、、、何てファンタジー！？？」

急に大きい声で変な事を叫んでしまう玲斗。若干目がキラキラしているのが逆に怪しい雰囲気を醸し出している。鷹のような鋭い眼差しが、今はウサギのような円らな瞳に見えてします。

「ファンタ・・じー？？」

「い、いや、何でもないです。取り乱しました。申し訳ない。」

落ち着きを取り戻した玲斗。
しかし、表情は嬉々としている。

「レイトちゃんは黒髪黒目だから、きっと加護持ちよねぇ？？」

「は、はぁ・・・全然わからないですが・・・。そうなんでしょうか？？」

本当は、デリアはこの時気付いていた。
先だって、玲斗がココに運ばれた際、読み取りの魔法を行使した為、身体状況に加え、属性なども大よそでは理解していた。
試すと言う響きには悪意を隠せないが、玲斗を読み取った時感じた違和感の原因を突き止めようとしていた。

「レイトちゃん、ここの世界の人じゃないでしょー？？」

「「「え・・・！？」」」

バーツとシェスの二人は、目をまん丸にして驚いた。
まさか、自分たちが召還した相手が、異世界人だとは思わなかったからだ。
異世界の存在については、常識として受け入れられている。

人間が住む、現界。　神々が住む、神界。　精霊が住む、霊界。
そして、悪魔の住む、魔界。

それぞれの世界とつながり、精霊や神や悪魔を呼び出す行為が召還である。
それぞれ、現界での実態、　質量を持つ肉体を持っていないからこそ出来る魔法である。
行使出来る術者は非常に少ないが、それでも認知されていた。

しかし、限界以外に人間が住んでいる世界があるなど聞いた事もない。
神界には、神気が。霊界には、霊気が。魔界には魔気が、
それぞれの世界に満たされており、それによって、それぞれの存在は構成されている。
肉体を持つ人間が住む「異世界」がある・・・。それは、今まで発

見される事の無かった新たな発見である。

ロストの遺跡の発見から、人体召還。そして、自分達の世界以外の人間。

二人は、発見が多すぎる。あまりの衝撃に、半開きになった口を閉じる事も忘れてしまっている。

そして、玲斗も同じくして、ボーっとした顔をしている。

薄々ではあるが、気付いてはいた。

明らかに、日本人ではない顔つきで日本語を喋る人たち。

趣味が違う・・・と言うか、古臭い・・・いや、時代が違う服装。

属性や加護といったもの。

玲斗が自分の世界で見知っている　「ファンタジー」　な香りが漂っていた。

しかし、確信を突かれる事で、受け入れられずにいた心に隙が生じてしまったのだ。

「「どういうこと??」」

ほぼ同時に意識を戻したバーツとシェスは、デリアへ問いかける。

それは知りたい。　と、玲斗もデリアを見つめた。

「あ～ら。どうもこうも、そ～ゆ～ことよぉ～。なんとなぁくしかわからないんだけどねぇ～。」

ての平を上へ向け、体の横で　さぁ　と上げるデリア。

「本人が一番何かを感じてるんじゃなぁいのぉ??」

そう言って、玲斗の方を見る。

「どうなんでしょう・・・。でも、やはり自分はこの世界の人間じゃない事だけは感じてしまいます。あまりにも、自分の知っている世界の常識とはズレているようだ・・・。」

「「えぇ～～！？」」

先ほどから驚きの声しか上げれない、シェスとバーツ。
この時、玲斗は不思議な体験をしているにも関わらず、取り乱す様子もない。
僅かな期待が、彼の目を輝かせていた事に気付くものはいなかった。

「ノックノ～ック。　おじゃまするぞ～」

気の抜けた声で登場するジェリオット。
デリア以外のハッとする3人。
そう言えば、来るって言ってたなぁ　とバーツとシェスは職員室でのやり取りを思い出していた。

「おぉ～君が例の黒尽くめ君かぁ！中々良いからだをしとるじゃないかぁ～！」

がっはっは　とわけのわからない事をのたまうジェリオット。
２つ程、若干冷たい視線がある事すら気付く様子もない。

「れ、玲斗です。玲斗　天川です。」

「おぉ～そーか！レイト君か！よろしく。俺はシェスとバーツの担任のジェリオットだ！ジェリオット＝アルバーム。先生とでも呼んでくれればいいからな！」

そう言うと、がっはっは。と笑いながらレイトと握手を交わすために手を差し出す。

思わず玲斗も握手に答える。

「よろしくです。」

勢いに流され硬い握手を交わす。

玲斗は、ふと、掌に違和感を感じた。紙のようなモノを握り込まされているようだ。

がっはっは　と笑いながらも、周りに気付かれないように目線を遣すジェリオット。

解った　と、目線で返答を返す。

「とりあえ～ず！まだ病み上がりなんだろ？？静かにしてやらんとな。」

一番うるさかった事は棚に上げるんですね。と、バーツは苦笑いしながら心の中で突っ込みを入れる。

「バーツ。シェス。お前らは写本終わったのかぁ！？」

「い、いえ・・・」

「まだよ。」

小さい声で否と告げるバーツ。憤りを隠し切れないと言うか、隠す気のないシェス。二人が返答を返す。

「ほら、行った行った！　じゃ、俺もお邪魔するかなぁ～！」

ジェリオットは、がっはっは　と笑いながら、二人の背中を押しながら、医務室を後にする。

嵐が通り過ぎ去って行った直後のように、医務室は元の静寂を取り戻す。

「あたい、喋る隙もなかったわねぇん。ジェリオット先生がいると、あたいの存在が希薄になるわぁ～」

「ははは。。。」

何を残念がっているんだろう。この人は。と、乾いた笑いを返す玲斗だった。

第5話　ファンタ・・・じー??（後書き）

こんにちわ。紅丸です。
星屑の使徒をお読み頂き、有り難う御座います。

やっと、主要キャラが出揃いフルネームまで出ました。
あと2人ほどメインキャラがノンタッチですが。
一人は次回。もう一人はもうちょっと先で出てくる予定です。

舞台は、異世界。
魔法とか魔物とか、そーゆーのを書きたくて書き始めた小説です。
ありふれたテーマではありますが、なんとかオリジナリティを出せたらと思っております。

世界観については、主人公（一応、玲斗です）と一緒に、この世界について知ってもらえるような形で進めております。
バーツ君と、シェスの掛け合いでも、必要と感じる部分については説明しておりますが。
まどろっこしい！と思われる方の為に、世界観を記述したモノも用意している最中です。
読みにくい小説だろうと思いますが、お付き合い願えればと思います。

ご感想を送って頂いた方々、有り難う御座います！
とても励みになり、意欲全開であります！
駄文では御座いますが、ご感想頂き、感謝感激雨霰で御座います。
ココで簡単ではありますが、お礼を述べさせて頂きます。

これから、少しずつ明かされる世界の全様。
天川　玲斗が見るこの世界。　そして、ここに来る事になった理由。
「世界なんて　『　おもしろい　』　か、『　おもしろくない　』
　かのどちらかなんだ。」

おもしろい世界を手に入れる事が出来るのか。

これからも、宜しくお願い申し上げます。　m（＿＿）mペコリ

第6話　『ひかるくん5号』

「う・・・。」

一瞬、言い様のない吐き気と眩暈に襲われる。
目を閉じたまま逆流してくる胃の内容物を引き下げるように深呼吸をする。
落ち着いていく言い様のない違和感。ここにきて、ゆっくりと目を開けた。

「・・・。」

装飾のない白い天井。病院のようなカーテン。真っ白いシーツ。ちょっと柔らか過ぎる枕。

（あぁ、夢・・・。じゃなかったっぽいな・・・。）

気絶する直前の事を思い出す。
今こうしている時の体の気ダルさと、若干の空腹感が、現状を夢でないとリアルに感じさせる。

（俺、向こうで死んだんだなぁ・・・。）

はぁ、とため息をつきたい衝動に駆られる。

（起きた時、森とか草原じゃなくて良かったな。）

確信は無いが、ココが自分のいた世界とは違うという感覚はある。
気絶する前の事もそうだ。

それに、自分の記憶にこのような景色はない。
よって、誰か知り合いの人の家・・・なんてオチも無さそうだ。
病院・・・？も、ない。日本の今の病院のベッドは鉄のフレームの白いベッドだ。
今寝てるベッドは木で出来ている。

（こんな高そうなベッド、病院にないしな。）

実は路上で倒れていた自分が、誰かに拾われたと言う、悲しくなる程低い確率の事しか思いつかない。
手は・・・　動く。
足は・・・　動く。
目は、若干寝起きで霞んではいるが見えるし、音も聞こえる。
聞こえてくる音は、窓の外から聞こえてくる聞いたことの無い鳥の声。
匂い・・・　これは若干知っている消毒液や薬品の匂い。言わば、病院の匂いに似ている。
微かに感じる甘い匂いは、さっきから目の隅に映っている見たことのない花。
多くの花の種類を知っているわけではないが。

（バラ・・・みたいだけど、青い・・・。）

それに加え、やたら長い花びらが花の下部分から伸びている。

（シャケみたいな形だな・・・）

その例えもどうかと思うが、シャケと言う単語から自分の空腹感を思い出す。

（腹・・・減ったなぁ）

お腹の虫が騒ぎ出す。

あ・・・鳴る鳴る　と思っていると

ギュルルルゥゥ

鳴った鳴った！と、子供の心境でそれすらも楽しむ。

（いやぁ、今の音は人生で3本の指に入るくらいの音だったな。）

などと考えていると、カーテンの向こう側から誰かが近づいてくる音が聞こえる。

シャー

「あら、起きてたのねぇ～。だったら声掛けてくれれば良かったのにぃ～」

現れた、金髪で緩いウェーブの髪と、キラキラ輝く垂れ気味の金眼。少し露出の高いワンピース状の服と、白衣のような服を着た女性が声を掛けてきた。

（うはぁ、美人だなぁ。。。日本人じゃ・・・全くないな。）

と、声に出さず考えていると

ギュルルルゥゥ

腹の虫の催促が入る。

あらあらぁ～　　と、言いながらクスクス笑い、女性はまた何処かへ行ってしまった。
よりにもよって、あんな美人に聞かれてしまっていた事に少し恥ずかしさを覚え、顔の温度が上がるのを感じた。

（おっさんなら恥ずかしくもないんだが・・・。まぁ目覚めて一番おっさん見たくもないか。）

コツコツ　と足音が近づいて来る。
去っていった時と同じ音だと感じ、さっきの美人さんが戻ってきたと気付く。

「はぁ～い。これは、あたいの特性栄養飲料よぉ～。固形物はいきなりだと良くないから我慢してねぇ」

と、ガラスのコップに入った僅かに光る液体が入っている。
ドロドロとはしていないが。。。

（これ、飲み物なのか・・・？）

玲斗は発光する液体を受け取ると、訝しげな目で見つめている。
正直、光る液体を飲む勇気がない。
あぁ、どこの誰か知らないが、冗談を言ってるんだなぁ！　と

「えっと、これ・・・飲み物？？」

「そぉ～よぉ～。光茸のエキスが入ってるから、とっても栄養満点よぉ。」

「そ、そうなんですか」

光茸ってなんだよ！！それか、この発光の正体は！！
心の中で激しく突っ込みを入れる。

（飲み物の味がしなかったら、吐き出せばいい。ドッキリなら止めてくれるはずだ。）

胃を決する。
いざ！　と、気合を入れると、発光する液体に口を付ける。
香りは甘かった。甘ったるいわけではなく、ほのかに薫る程度。
ベッド横に飾ってあった花と同じ匂いだ・・・と感じながら、口に入ってくる液体の味を味わう。
想像通り、少し甘い。
どう甘いのかは、甘いものの苦手は玲斗には表現出来ないが、

（ハーブティに角砂糖を半分くらい溶かしたみたいな味だな。）

だ、そうだ。
これは、飲める！そして、止められないので、本気で飲み物なんだな。
そう確信し、一気にコップの中身を空ける。
するとどうだろう。さっきまで鳴っていた腹の虫の機嫌が良くなっている。
微かにある満腹感。腹7分目程度だろうか。
とにかく空腹感がなくなっていくのを感じた。

「すごい。。。」

「でしょぉ～！あたいの特性栄養飲料　『ひかるくん5号』　は、中々の傑作なのよぉ～」

もはや、それは飲み物の名前なのか。と突っ込みを入れたくなるネーミングセンスだ。
しかし、『ひかるくん5号』の効果の程は、身を持って体験した。
『5号』って事は、1～4号もあるのだろうか　などと思っていると、

「うごけるかしらぁ？？」

「はい。問題ないと思います。」

「ならぁ、ちょっとコッチに来てくれるかしらぁ？？」

女性は手招きしながら机と椅子のある場所へと移動する。
促されるままに、ベッドから降りる。
少し、立ち眩みを感じたが、　ふぅ　と、呼吸すると収まっていく。
手足には問題ない。僅かに倦怠感があるが、特に問題があると言うわけでもない。

女性の近くまで行くと、女性は近くにあった木のハコを引っ張ってくると、トントンと木のハコを叩く。
すると、木のハコの上部が跳ね上がった。
蓋のようになったそれの中から、クッションのようなものが現れる。
モコモコと膨らんでいくと、とたんに椅子のような形になる。
簡易的なソファのようだ。木のハコの原型が残るのは後ろから見た足部分にあるのと、背もたれに木蓋部分。

（おぉぉ、すげぇ。なんだこれ。）

「ほら、座ってぇ。　ちょっと検査と問診するわよぉ～」

「あ、はい。」

ちょっとした感動を覚えながら驚いていた玲斗は、女性の促され、そのソファ？に越しかける。
やたら柔らかいのかと思っていたそれは、玲斗が座っても沈み込む事なく、ある程度の弾力を持って玲斗を支えた。

「ちょっと深めに座ってぇ、背もたれに凭れてねぇ～」

「はい。」

指示通り、深めに座る。そして凭れかかった。
すると彼女が、掌をこちらに翳し、口元で小さくなにやら呟いた。
すると、ソファ？の温度が少しだけ上がったような気がする。
２０秒程だろうか。
彼女は、翳していた手を下げた。

「体にぃ、問題はないわねぇ～　どこか、具合の悪いところはあるかしらぁ？？」

「いえ、ちょっと体が重いような気がしますが、問題ないです。」

「そぉ～。　じゃぁ～、自分のぉ名前は言えるかしらぁ？？」

「天川　玲斗です。」

「アマカワぁ・・・レイトぉ？？」

玲斗が名前を答えると、彼女は表情はにこやかなまま崩さず、小首

をかしげる。
なんだろう　と考えていると、ふと玲斗は思いつく。
彼女の西洋風な容姿に、表記が違うのかと思い、言い直す。
「あ、えっと・・・名前が　玲斗で、ファミリーネームで良いのかな？が、天川です。」
「レイト君ねぇ。」
「はい。」
名前が先で、苗字が後。
日本語で喋っているからこそ、違和感を感じる。
（言葉は通じるけど、文化は違うみたいだな・・・。）
などと考えていると、
バーン！！
と、扉が開かれる音がする。
驚いた玲斗が扉を見て驚いていると、
瑞々しくストレートな緑の髪を手でぱっと払いながら、快活そうなオレンジの目の女の子が入ってくるなり、
「デリアさぁん！黒い人起きました？？」
と、大声で問診をしてくれた彼女に問いかけた。

「ちょっと、医務室だからぁ～」

続いて、男にしては少々長めなクセのあるブロンドの髪を汗で若干濡らし、澄み渡る空のような鮮やかな目をした少年が後に続く。

（なんだなんだ・・・！？）

玲斗は、張り付いたままの驚いた顔を隠せずに、ただ黙って扉の方を見ているしか出来なかった。

第7話　目の色が変わるってやつだな

渡されたメモの文字は見たこともない文字で書かれていた。
ジェリオットと紹介を受けた男性。
オレンジの短髪。筋骨隆々な彼から渡されたメモを、ベッドに戻った俺は、カーテンが閉じている事を確認した後に目を通した。

（セオリー通りだなぁ・・・読めるよ。書けないんだろうけども。）

見たこともない文字にも関わらず読める。しかし、違和感が激しい。
このギャップは文字を覚えるまで埋まらないんだろうなと感じる。
こうゆースペックアップは、正直有難い。
一人、知らない世界に放り出された自分。先人の知恵もなく、自分で吸収しなければならない知識。
特に、文字情報は大切だと言える。
本が存在するのは、デリアさんの机の上にあった書籍類で確認済みだ。
タイトルの文字まで見なかったが。

（なになに…

『一時間後にデリア先生が帰宅する。デリア先生が帰宅した後、迎えに行くから、寝たフリでもして、あれこれ語らないように。』

危ないな…。ギリギリセーフって感じか。）

先ほど、異世界人であることはバレてしまった。
しかし、そのタイミングでジェリオットが乱入したために、色々聴

かれる事も無かった。
渡されたメモが気になり、色々聞きたそうにしているデリアに、少し疲れたと申し出て今に至る。
兎に角、あと一時間程寝たフリを決め込もうと考えて、静かに目を閉じる…。

（私達の愛しい人。）

『またあんたか・・・。なぁ、この頭に響く感覚は仕様か??』

2回目ともなると、割と冷静に対処出来るものだ。と玲斗本人も驚く。

（私達には肉体がありません。人間達が神、精霊、悪魔と呼ぶ精神と力だけの存在。こうして直接、貴方の精神に語り掛けなければ声は届きません。）

『ならしかたない。なぁ、俺には天川　玲斗って名前があるから、名前で呼んで欲しい。愛しい人とか、恥かしいから返事してやらないぞ??』

冗談めかして自分を名前で呼ぶよう求める。
やはり、名前で呼んでもらった方が気が楽だ。
何より、今まで一人の恋人もいなかった玲斗にとって、愛しいだと

か言われる事に抵抗を禁じえない。

（それは、、、困りますね。分かりました。レイト。貴方の望むままに。）

『で、説明でもしてくれるのか？俺がこんなところに来た理由を。』

（それは…出来ません。その理由は私達の中でも混ざりあい、そして、それぞれが渇望しています。）

NOと言われる事を、最初からある程度想定して問うてみた。
案の定、無理だと言われるが、新たな疑問が玲斗の頭の中に浮かぶ。

『気になってたんだが、何故複数形なんだ？喋ってるのはあんたじゃないか。あんたの理由はないのか？』

（私は全て。私は答え。私は希望。個であり、複数でもあります。特定の意識は存在しません。）

『危なっかしい奴だな。』

危なっかしいと思った。
個がないこと。それは、自分の存在の希薄さを物語っている。
人は、自分を少なからず認識して生きている。個人の考えや意識。
希望や絶望。それは、個としての存在があるからこそ抱くことの出来る　想い　に他ならない。
それがないと言うことは、お前は誰かと問われても答える答えがないという事。
あまりに希薄だ。無くなってしまっても誰も気付かない存在。

（レイトは、やはり面白いですね。）

『さいですか。　で、説明じゃなくて、何の為に話しかけてきたんだ？』

（レイトは、これから望むとも望まぬとも、この世界にとってとても重要な存在となって行きます。）

『むぅ。。。それは、たいそうなこって。』

（その時の貴方に必要なもの。必要な力付くを貴方にお渡し致します。）

『お、いいのか？？あんたらにとってガッカリするような奴かもしれないぞ？』

（構いません。それはレイト。貴方の選択。貴方の想うがままに。貴方の望むままに。愛しい人。レイト。）

『なんだか、余計恥ずかしい呼び方になってんじゃねぇか。まぁ、いいか。貰える物なら貰っておく。有難う。』

（星の使徒。世界は貴方の想いのままに。）

『一大事だな。まぁ、俺は俺だ。世界をどうこうしようとも思わんしな。そう言えば、あんたは何と呼べばいい？』

（・・・。名はありません・・・。敢えて言うならば、ウェルム・・・。世界と呼んで下さい。）

『あぁ。わかった。ウェルム。』

（はい。さぁ、レイト。目覚めて下さい。世界が貴方を待ち望んでおります。）

『？？』

急に意識が覚醒する感覚が襲う。夢から覚める。そう玲斗は気付く。知らぬ間に寝てしまっていた。

結局何も聞けなかった。くれると言っていたもの正体もわからない。ただ、今は声の主の名が聞けただけで収穫だと感じた。

彼女？彼？ヴォルムが言うような事が、これから自分に訪れるなんて実感は一切ない。

しかし、それが「おもしろい」のであればそれでいいさ。と、思う。

今は覚醒していく感覚に身を任せる。

「レイト！レイトぉ～！」

呼ぶ声が聞こえる。

（誰だ人の心地良い眠りを妨げようとするのは…。）

「起きろ～。行くぞぉ～？？」

ハッとして眼を開ける。

寝たフリをするつもりが本当に寝てしまっていた。しかし、寝てしまったのが自分のせいか怪しくなる。

（ウェルムのせいだろ、たぶん。いや、そうに違いない！）

ははははーと、誤魔化し笑いをしながら頭を掻いた。

「いやぁ、ゴメンなさい。布団の寝心地がよくて…って、どうしたんですか??」

目覚めてから、起こそうとしていたジェリオットの発言がない。
次第に焦点の定まり出した目は、驚いた顔をして止まっている。

「レイト・・・。お前さん、目の色って黒だったよな?」

「・・・? 黒、ですけど。」

「だよな。」

黒の目と言うのは珍しいのだろうか? レイトはそう感じながらも、答える。
何についての問いなのか、いまいち良くわからない。

「えぇ。それがどうかしましたか?」

「・・・。最初の会った時、黒だったよなぁ。と。」

「・・・?」

「そこに鏡があるから、見てみろ。」

指を指された先を見ると、洗面台らしきものがある。
らしきと言うのは、レイトが見知った形ではなかったためだ。
簡単に言えば、蛇口のない洗面台。石鹸を置いたりする場所には青

い石が置いてある。
所変われば、文化も変わるんだなぁ。などと暢気に洗面台の前までやってくる。
この石なんだろうと考えつつ近づいた為、顔を見ていなかったが、ここまで近づいてきて自分の顔をみやる。

「・・・・!!?」

「おぉ、やっぱりお前さんも驚くのか。」

「ちょ・・・何か、えー!?」

状況を把握出来ない。いや、理解はしているが驚く他ない。
目の色が違う・・・
いくら自分でも、青や赤や金色を見てきたために、その程度の変化なら驚かない。
自分の目は、異質なものになっていた。
全体的に濃い群青。瞳はもちろん黒い。しかし、目の中に小さい粒上の金色が散らばっている。
これを見た玲斗は、自分の世界の写真やテレビで見た事のある銀河を思い出した。
異様にキラキラと光を反射する金色の粒。
アニメやマンガで描かれる登場人物達は、異様な目の大きさとキラキラの瞳が可愛らしい。
しかし、目の前で見る自分の瞳がキラキラしているのは頂けない。

「なんでこんな・・・。　・・・・・。　も、もしかして・・・コレか?」

「すごい目だな。見たことないぞ。そんなの。　何か原因に思う節

でもあるのか？」

「いや・・・。言っても、多分信じて貰えないですよ。」

レイトが思い出したのは、つい先刻のやり取りだった。

『　（その時の貴方に必要なもの。必要な力付くを貴方にお渡し致します。）　』

（コレがっすか・・・？）

問いかけに答えてくれそうな彼の存在は、今は自分に対して言葉を発しない。

発しないと言うよりも、頭に直接響く感じなのだが。

（真相は、次回会うまでわからない・・・ってことかな。）

「うーむ。お前さんの存在自体が、我々の常識ではずいぶんと信じがたいんだがな」

などと言っているジェリオット。

正直、それもそうだ。だからこそ、こうしてコソコソと玲斗を連れに来なければならなかったのだから。

しかし、ここにきて、玲斗の存在は、輪をかけて異質になってきた。

「でしょうね。俺の常識でも逸脱しています。」

玲斗は返す。

「目にはな、力が宿るんだ。属性ってやつは目と髪に出やすいから

な。」

「だから、色とりどりといるわけですね。」

「あぁ、細かい所は後々説明してやるが。　その目は俺の知ってるどの属性にも当てはまらんな。」

「色とかの範疇越えちゃってますもんね。」

「あぁ。これが本当の　『目の色が変わる』　ってやつだな！」

がっはっはと笑うジェリオット。

人ごとだと思って　と、ジェリオットへ毒付きながら、鏡で自分の目をまじまじと見ながらやり取りを交わす。

その背中を見ながらジェリオットは、自分の処理出来る範疇の斜め上を行く玲斗を、ある自分物のところまで連れて行かなければならない事に気付いた。

「とにかく、これは急いで学院長のところに行かなきゃならんようだ。」

「学院長・・・？」

「あぁ、これから案内しようとしていた所だ。」

まぁ、ついてこい。　と言いながらジェリオットは医務室を出て行こうと扉の前に立つ。

扉を手で押さえながら、反対の手で玲斗を手招きする。

もう、今はこれ以上何も考えまい。

自分の頭は、とっくに一日の稼動限界を超えている。後はあの人に任せよう。
そうジェリオットは思いながら、事の次第を考える頭を停止させた。

「んじゃ、行きますか。」

「はい。」

二人は、学院の最高権力者の所へ向かう。
玲斗はこの時、校長先生みたいな感じだろ？まぁ、大丈夫だ　などと考えていたが、十数分後、自分の考えを改めざるを得ない事となった。

第8話　入学なんて出来ませんか？

「フフフ。貴方がレイト君ね。」

やけに色っぽいネェちゃんが居ました。

レイトは、ジェリオットに連れられ、この学院の理事長室まで連れてこられていた。

来る道中、色々な憶測を浮かべ、理事長とやらの存在について考えていた。

頭は禿げあがり、特徴的なクルンっとしたヒゲを蓄えた初老のイギリス風紳士。

白髪のロン毛のヒゲも白髪でロングな、いかにも魔法使い然とした老人。

ひいては、フランシスコな宣教師風赤鼻親父。

諸々の妄想は、儚くも音を立てて崩れさっていった。

青く長い髪を細く両サイドで三つ編みにし、そのそれぞれの先に金色に光る留め具で止めてある。正直、重たくないのだろうかと思う。

アンダーフレームの眼鏡を掛けた瞳も、髪の海のような深い青と同じくし、濡れたような煌めきをもつ切れ長の目。

黒いマントの下には、これまた黒い光沢のある長めのタイトなドレス。飾り気はないが、大人の魅力を引き立てる。これまた、女性らしい体のラインが際立ち、スゴイ事になっている。

自身の表れであると言わんばかりの胸の開きには、正直、目のやり場に困ると言ったものだ。

青い髪の色っぽいネェちゃんは、学院長の机だろう、巨大なデスクの手前側に腰を預けている。

「・・・。」

「あら、どうしたの？固まっちゃってますが・・・？」

「・・・わからんでもない、わからんでもないぞ！レイト君！」

玲斗は、すっかり返す言葉を失っている。
不思議そうに、学院長は玲斗を見やり、ジェリオットの方を向いた。
ジェリオットはジェリオットで、拳を握り、プルプルとしながら熱いオーラを立ち昇らせている。

「おーい。」

学院長が呼びかける。

「・・・　っ！！　すいません！！」

「しきりなおしますね。貴方がレイト君ですね。」

「はい。　玲斗　天川　です。」

再度問われた問いに対して、自分の名を答える。
隣でウンウン言っているジェリオットは、この際スルーする事にして、二人は会話を進めた。

「私がこの学院の学院長をしております、アシュレイ＝フィリナース　です。」

「は、はい。宜しくお願いします。」

見た目の印象とは違い、ハキハキとした言葉使いに、玲斗は少し安堵する。
正直、デリアのようなタイプの女性は苦手と言える。女性自体が苦手と言うのもあるが、デリアのようなタイプに女性は扱いが解らず困ってしまう。
その点、今紹介を受けたアシュリー学院長は、割とマシと言える。見た目がアレな為、あまり至近距離に居たくないのは、違いないのだが。

「急に呼び出してしまい、申し訳ありません。おそらく、君はココにいる理由も良くわかっていないでしょう？」

「そうですね。本当に良く解らないです。」

「その割には、随分と落ち着いてるんですね？」

「正直、頭の中はパニックですが、慌てても仕方ないので。」

「賢そうな子で助かるわ。」

急な呼び出しに対しての侘びと、ちょっとした会話。
いい子は好きよ？などと笑っているアシュレイ。ちょっと年の離れた姉といった雰囲気がある。
いい人そうではあるが、こちらの腹の底まで覗かれそうな雰囲気を持っている。

「貴方が異世界からやって来た事については、聞いております。」

「お前さんがこの世界へやって来た経緯については、俺から説明するぜ。」

そういって、ジェリオットが申し出る。

玲斗からしてみれば、誰から聞いても大差ないため、お願いしますと、促す。

「まず、さっき医務室で会ったシェスとバーツについては覚えているな？」

「はい。緑髪の女の子と、金髪の男のですね。」

「あぁそうだ。まぁ、そいつらが実は事の発端なんだ。」

そう話し始めた。

この学校の事。進級テストの事。青銅の洞窟と言う場所。ロストと呼ばれる旧時代文明。そして、玲斗の召還と、召還について。

聞いたこともない文化。

「大体、あらすじは解りました。」

「そうか。で、シェスとバーツについてなのだが、彼らの処遇はレイト君。お前さんに任せようと思う。」

ジェリオットがそんな事を言い出す。

玲斗は、言葉の意味も理解出来ず、問いかける。

「え！？　どういう事ですか？」

「やはり、ここは当事者である君に判断を委ねたい。不本意にもこの世界に招かれた君。そして、原因となった二人。君の好きなように裁いてもらって構わない。」

はぁ。と玲斗は今いち理解しているのか、していないのか解らない返答を返した。

そもそも、シェスとバーツの『責任』について、思うところもない。

「それはどう言う・・・。」

「君が退学と言えば、二人が退学となる　と言う事だ。」

そう、ジェリオットは若干ではあるが、険しい表情で玲斗に告げる。

「なるほど。そう言う事なら、俺は特に二人に退学とかして欲しいわけじゃないですよ。」

「そうか・・・それな・・・　「強いて言えば。」　ら・・？」

話を終わらせようとしたジェリオットの言葉を遮るように、玲斗は続けた。

このまま一件落着とさせようとしているジェリオットの進行空しく、玲斗は悪戯な笑みを浮かべる。

普段より目つきがキツい玲斗の笑みは、何を言うつもりだ　とジェリオットに冷や汗をかかせた。

こっちの申し出に対し、今のタイミングだからこそ、お咎め無しに済ませる事が出来る。と踏んでの提案だった。

そんな二人の思惑を玲斗は見抜いているのか、至極たちの悪い笑顔をしていた。

「俺を案内させるようにして欲しいかな。」

内心、ドキドキしていたジェリオットとアシュレイ。
説明が始まったあたりから口を出さずに聞いていたアシュレイが玲斗に問う。

「・・・と、言いますと？」

「いや、だからこの世界を案内して欲しいんだ。俺が慣れるまで。」

「それでいいのか？」

内容を聞いたジェリオットが、玲斗に返す。
玲斗は、悪戯が成功した子供のような笑みを浮かべた。

「あぁ。いかんせん、俺はこの世界の事をあまり知らない。帰る手立ても、さっきの話からじゃ見つけられるか解らない。帰られないならココで暮らすしかないだろ？知るって事は、そのまま死活問題になるから。」

アシュレイの玲斗に対しての評価が変わった瞬間だった。
達観したような落ち着いた態度は、一種の混乱から生まれた思考の停止から来るものだと踏んでいた。
いきなり訳の解らないまま異世界へ飛ばされたのだ。それが至って普通の反応と言えるだろう。
しかし、玲斗は違った。
自分の状況を理解しようと勤め、そして打開策を探る。打開する方法を探す希望は捨てず、しかし保険も掛けておく。
とても冷静な判断だった。

「わかりました。それについては、二人に言い渡しておきます。」

「よろしく。あぁ、あと出来ればでいいんですけど、この学校に入学なんて出来ませんか？」

そう、付け加えた玲斗。

アシュレイは、妖艶過ぎないそれでいて、魅力的な笑顔を玲斗に向ける。

「かまいません。あなたは有望な人材と見えます。適正検査は行わさせて頂きますが、どこかの課には所属出来るよう取り計らいますので。」

アシュレイは全面的に玲斗の提案を呑む。

ジェリオットは、この一癖も二癖もある学院長に、自分の要求のほぼ１０割を飲ませた少年を見て驚き、そして関心していた。

規格外な奴。そうジェリオットは玲斗に対して感想を纏めた。そう考えにふけっていたジュリオットだが、　そうだ　と思い出したようにアシュレイに確認する。

「学院長。彼の目について、何かご存知な事はありますか？」

「ちょっと良く見せて下さい。」

そう言いながら眼鏡を治しつつ玲斗に近づくアシュレイ。

玲斗は自分に近づいてくるアシュレイに対し、肩に力を要れつつ半歩下がる。

「そんなに怯えなくても大丈夫ですよ。」

と、アシュレイは笑って諭すが、元来、女性の苦手な玲斗にはしかたのない事かもしれない。

「綺麗な目ですね・・・見たことの無い目です。見たことはないですが、聞いた事くらいは。」

「な、何なんですか??」

玲斗は、強張った姿勢のままアシュレイへ問う。

「確かな事は解りませんが、これは、星。星の加護の目だと思います。」

「「星??」」

玲斗とジェリオットが聞き返す。

しかしながら、玲斗とジェリオットの反応には若干の差があった。

玲斗は本当に訳もわからず聞き返したが、ジェリオットは事の希少さに驚きの声を上げていた。

「星って・・・13属性の中でも加護持ちが今まで確認されてない属性じゃないですか!??!?」

ジェリオットは驚きの声の後、続け様にアシュレイへ問いかける。

「えぇ。地・水・炎・風・雷・木・金・星・光・闇・生・死・無。この13属性・・・」

アシュレイは玲斗へ説明を始める。

曰く、最も加護持ち・属性者の多い　地・水・炎・風。
そして、そこから派生する形で存在する　雷・木・金。
相反する存在として、世界の断りを司る　光・闇・生・死。
そして、魔法の力。　魔力を単に　力　として操る　無。

無については、魔法の基礎となり、誰もが使う事の出来る力。
属性や加護があれば見につけられる　地・水・炎・風・雷・木・金の　7属性。
実に人口の9割を占める。
あとの1割を占めるのが光と生。
生については諸説あるが、元々生きとし生けるもの全てに備わると言う力。
光は、稀に現れる癒しの力を持つ者。
闇・死　については、一般的にモンスターや悪魔しか持ち得ないもの。
闇に蠢くモノ、そして不死族。

「星とは、天空の星々を統べる力。そう伝えられています。」
アシュレイはそう締めくくった。
「俺が、その星の加護を持つ者なんですか？」
自分は、そんな大層な存在でないと玲斗は続ける。
確かな事は言えないですが、と念を押しながらアシュレイは、

「どちらにせよ、その目の加護が星であるならば、それは凄い事です。」

「あぁ、なんせ、建国以来始めての事だからな。」

ジェリオットは少し興奮気味のようだ。

「こちらでも、調査をさせて頂きます。結果については、逐次報告させてもらいますね。」

そう、アシュレイが告げると、　宜しくお願いいします　と玲斗はお辞儀をした。

「今日は疲れておいででしょう。」

「えぇ、まぁ。」

結構な睡眠をとり、身体的にはまだまだ動ける玲斗だったか、色々な事があったせいか、頭の方がついてこない。
正直、この後何を問われても、まともに返答する自信は無かった。
早く医務室にもどりたぁ～い　と心の中では叫んでいた。

「とりあえず、今日休む部屋は用意しています。ジェリオット先生に案内してもらって下さい。」

「え？医務室で寝なくていいの？　ラッキー！」

さっきまでの落ち着いた少年は、指を鳴らしながら喜ぶ、年相応の少年に戻っていた。

第8話　入学なんて出来ませんか？（後書き）

どうも、紅丸です。
更新二日続けて滞った原因は、怠惰以外の何者でもありません。
申し訳ない！

シェス「ちゃんと更新しなさいよ！」
紅「うわっ！出た！」
バーツ「こんにちわ。」
紅「あ、どうも。こんにちわ。」
シェ「出たっ！じゃない！バーツとの扱いが違うし！そんな事より、私達2話も出てないじゃない！」
紅「だからこうして出てもらったり。。。？」
シェ「あとがきだけじゃない！」
バ「無茶言って作者さん困らせたら駄目だよ・・？」
シェ「うっさーい！ムキィィィ！！！」
バ・紅「「ひ、ひぃぃぃぃ！！」」

バ「僕の気持ちも解ったみたいだね・・・」
紅「うん・・・」

シェ「なんですって？？？」
バ・紅「「ひ、ひぃぃぃぃ！！」」

次話は、シェスとバーツも出ます。
よろしく～！

第9話　友達になろう

翌朝。

「うぅ～～～ん！！！」

両手を高く上げて背伸びをする玲斗。
昨晩、学院長室を出たのが夜の9時頃。一日の時間は元の世界にいる時と同じ24時間だ。
案内してもらいがてら、ジェリオット先生に世界の基本的な事柄について聞いていた。

一日が24時間。
それにあわせて、人々も世界かつを送る。
一週間と言う概念も一応はあるらしいが、あまり実用的ではないとの事。
約5日おきに1日休養日があるが、これは学校が定めているだけであり、特にそうしなければならないと言うものでも無いらしい。
一ヶ月の概念は、ほぼ変わらなかった。ただ、月の呼び名が一年の初めから順に
生月（うみつき）　光月（こうづき）　地月（ちづき）　木月（きつき）　風月（ふうづき）　雷月（らいづき）　炎月（えんづき）　水月（みつき）　金月（こんづき）　星月（ほしづき）
無月（むつき）　闇月（やみづき）　死月（しづき）
と、13属性になぞらえられており、各月が30日で構成されている。
一年の長さは同じ365日。
計算が合わないんですが　と、問いかけてみたところ、「死月」は5日しかないんだそうだ。
なるほど、理にかなっている。と玲斗は思ったが、かなり切実な理

由から来ているらしい。
死月の間5日間は、太陽が昇らず夜が続く。実際には上ってないわけでなく、この世界の月との日食が続くらしい。
その間、人々は外出を控え、家の中で過ごす。
主に夜を好むモンスターが活性化する死月に、外をブラつくなんてのは変わり者の所業だ。
年によって、4日だったり5日だったり6日だったりするらしいのだが、死月が開ければ生月。そう決まっており、元の世界で言うところの「閏年」の調節がココで行われているようだ。
他にも、人々の生活習慣や国際情勢など、おおまかな話を聞いたが、これは体験するのが一番だと玲斗は考えていた。
基本的に「百聞は一見にしかず」が、玲斗の行動原理である。

あてがわれた部屋は、学生寮だった。
部屋自体は、大きくもなく小さくもないと言った印象だ。
木製にマットレスが敷いてあるベッドが1つ。机と椅子が1つ。本棚が1つ。そして収納が1つ。
シャワーまで付いており、これは非常に有難かった。使い方は非常に不可思議なものだったのだが・・・。
2cm程の青い石と赤い石。それらをシャワールームの上に設置してある桶の中に入れる。
桶は、幾分高い場所に設置してあり、石を入れる用の踏み台もあった。
入れたのち、桶に記されている魔法陣に手を触れる。原理は解らないが、1度触れると魔法陣が光だしお湯が流れる。もう一度触れると止まる。
ジェリオット曰く、
「術式で石に溜め込んだ水と熱を、特定の魔法陣で開放するんだ。便利だろ??」
と、得意げに言っていた。

たしかに、たった２ｃｍ程度の石ころの中に、シャワーが出来る程の水や熱を溜め込めると言うのは、かなり便利な技術だ。
ちなみに、青い石が放水石。赤い石が放熱石と言うらしい。

「まぁ、俺の元いた世界は、蛇口を捻ればお湯が出ますけどね。」

と、負け惜しみを言ってみたりした玲斗だが、そういう機構の洗面台もある　とジェリオットに言われ、内心ガッカリしてみた。
とにかく、かなり快適空間な部屋をあてがわれ、玲斗は若干恐縮してしまったが、　正当な利益として受け取っておけ　とジェリオットが言う為、それなら、と甘んじて享受する事にした。

場面は戻って、朝の玲斗。

（そういえば、昨日の夜は眠ってもウェルトが話しかけてこなかったなぁ）

など、と思いつつ。まぁ、いいかと思考を区切る。

「たしか、食事は学院の食堂でとれるって言ってたな。」

玲斗は薄い金属のような質感のカードを手にとった。

「これは、学院証だ。これで、学院内の施設を利用出来る。別途で金のかかる物もあるが、食事は無料で食えるからな。無くすなよー！」

と、昨日の帰りがけにジェリオットに手渡された物だ。
よくよく考えると、部屋がすでに用意してあり、学院証まで用意さ

れている。
学院側は、自分を学院に入れる事も折り込み住みだったらしい。
もう少しコッチの条件を出しておいても良かったかな　と、玲斗は考えたが、分不相応な対応をされるのも堅苦しいしな　と考え直した。
とりあえず顔でも洗うか　と、部屋に用意されているタオルを手にとり、シャワールームに向かった。
玲斗が顔を洗い、シャワールームから出てくる

コンコン

それを見計らったようなタイミングで、部屋の扉がノックされる。

「はーい。」

と、返事をしながら、ドアの鍵を開けた。

「おはよう！！」

「お、おはようございます。」

ドアの前に居たのは、元気な挨拶をするシェスと、何故かシェスの後ろに隠れるように佇むバーツだった。

「ちょ・・・あんた、服・・・」

「あ！あぁ・・・申し訳ない。」

「は、早く着てきなさいよ！！」

寝るときは、基本下着姿な玲斗。それに加え、こちらに来た時の黒い学生服しかない。詰襟の言わば学ランを、寝るときまでは着ていられない。
急いで部屋の中に戻り、ハンガーにかけ収納に入れてあったズボンとシャツを着る。
学ランはどうするか考えたが、寒くもないし必要ないと決めると、足早に玄関へ戻る。

「よし！朝食に行くわよ！学院証は持った？？」

「あぁ。持ってる。」

どうやら、朝食のお誘いに来てくれたらしい。
食堂の場所も解らなかった為、玲斗は助かると思いついて行く事にする。
部屋に鍵を掛け、二人の後をついていく。

「ジェリオット先生に話しは聞いた。あなた異世界の人間なんですってね。まだ信じられないわ。」

前を向いたまま、シェスは話し出す。

「あぁ。どうやらそのようだ。二人が俺を召還したと聞いたよ。」

玲斗も気にせずに答える。
ビクっとバーツの肩が反応する。

「ごごごごご、ご、ごめんなさい！」

突然、「ご」を連発し、立ち止まって謝り出すバーツ。
シェスも立ち止まり、こっちを向いて頭を下げる。
そんな二人を見て、玲斗は苦笑した。

「私達のせいで、この世界に来た・・・。怒ってるわよね・・・。」

シェスが悲しそうな声で言った。
バーツは相変わらず、ごめんなさいを連発している。

「気にするな・・・とは言えないが、来てしまったもんは仕方がない。先生方にも言ったが、俺を責任持って案内してくれたらそれでいいさ。」

バーツは顔を上げて、それでもまだ謝り足りないといった顔を見せる。弱気な表情が、より弱気になっている。
シェスもシェスで、居心地が悪そうにしていた。

「でも・・・」

と、シェスは言いかけて止めた。
玲斗が、ニコッと笑いかけていたから。目つきは相変わらず悪いが、それでも怒っていないのは判断出来た。

「それに、俺も一応は受け入れてこの世界に来たから。」

「・・・？　どう言う事？？」

「まぁ、歩きながら。」

そう先を促しながら、自分がこの世界に来た時の事を説明し出した。

突然自分の体が浮き上がった事。
その後聞こえた謎の声。
ウェルトと名乗ったその声の主が、言っていた事。

「って、言う事は、向こうでの玲斗は死んじゃってるってこと！？」
驚いたような声を上げ、また幾分困った顔になってしまった。

「そうだな。たぶん、向こうじゃちょっとした騒ぎになってるんじゃないか？まぁ、家族も居なかったし、友達もあんまりいなかったし。悲しむ人は少ないがな。」

そう言った玲斗の顔は、笑ってはいるものの、どこか寂しげな色合いを見せていた。
こうなって、バーツはまたゴメンナサイを連発しだしてしまう。
またか　と、苦笑いをする玲斗。

「気にするな。俺もおもしろそうだと了承して来た身だ。それに、死んだって言っても俺はココにいる。そんな恐縮しなくて言いよ。」

二人に諭すが、一筋縄ではいかないようだ。
そうだ！と玲斗は思いつき、思いついた事を二人に言った。

「よし。二人とも俺と友達になろう。前の世界より、こっちの世界の方が『おもしろい』ってところを見せてくれよ。」

そう言った玲斗の顔は、楽しそうな笑顔をしていた。
ウェルトは、貴方次第だ　と言っていたが、一人で面白い事を探すより、誰かと探した方が早い。

誰も知らない世界で、世界との接点が自分にはない。ただココにあるだけ。
そんな世界との接点として、二人と友達になればいい。

「ぷっ！！」

シェスは、どう言うわけか噴出してしまった。
バーツは、ニコッと人好きのしそうな笑顔になった。

「友達なんて、なろうって言ってなるもんじゃないんじゃない？」

笑いながらシェスが言う。

「それはそうか。まぁ、それで全部水に流すって事にしようぜ。」

あっけらかんと言う玲斗。

「あんたがそれで良いんなら。はぁー！何か色々悩んでたから、お腹へっちゃったわ！」

「切り替わり早すぎだよぉ」

すっかり切り替わってしまったシェスに、バーツがツッコミを入れる。
玲斗は、やっと喋ったな　と、バーツに茶々を入れると、バーツは恥ずかしそうにしながら

「怖い人だったらどうしようかと思ってて…。」

ははは　と笑いながら、玲斗がバーツに

「こんな見た目だけど、実は紳士だから。」

そう言いながら、バーツの肩を軽くパンパンと叩く。

「貴方の世界の紳士は、裸で来客を迎えるのね？」

「男たるもの、帰宅後は裸。基本だろう！それにあれは下着姿であって、裸ではない。」

「そんなの聞いた事無いわよ～！」

「軟弱者が多いんだなぁ。俺の世界では硬派でダンディな印なんだぞ！！」

などと合っているのか、合っていないのか解らない情報を二人に流す玲斗。

三人はそんな他愛ないやりとりをしながら笑い合っている。

玲斗は、悪くない。召喚したのが、この二人で良かったと、口には出さず二人が歩く背中を見ながら歩いて行った。

第9話　友達になろう（後書き）

どぅーも。紅丸です。
少しずつ、世界の様相が見えてくるような話でした。
説明も多く、ちょっと読み難いですね。
今回解ったのは、玲斗が裸で夜寝る事です。

玲斗「その設定はどうにか変更出来ないのか・・？」
紅丸「主人公まで文句言い出しやがりました・・・」
シェス「驚いたんだから！！！変態共！！！」
玲「シェスは元気だと思っていたが、こんなキャラだったのか。」
紅「まだ本性知らないもんね。ネコかぶってるんですよ。」
シェ「あんたたち！人のセリフをスルーするな！！！」
玲「次話は、食堂でのひと時で。。。いいんだよな？」
紅「そうだよー。タイトルは違うけどね。あと、新キャラも出るらしいよ！」
玲「おお！それは、必見だな！！！」
シェ「あ　ん　た　た　ち　・　・　・」　ボワッ！
紅「うわぁ！！！なんか、火出てる！火出てる！！！」
玲「おおお！これが魔法か！！！！」
紅「玲斗くん・・・」
シェ「燃えろ！！！！」
玲・紅「「ウギャーーーー！！！！！！！」」

バーツ「次話もよろしくお願いします。（え、なにこのポジション）」

第１０話　グラベスク

「おぉ！これはまともな食べ物だ！！」

食堂に着き、食事を見た玲斗の第一声がこれだった。

「んな！？変な声出さないでよ！！当たり前じゃない！」

驚いたシェスが玲斗をややキツめに注意する。

チッチッチと、指を振りながら玲斗がシェスに向かって　分かってないな　と続ける。

「知らないところに来て一番困るのは何か。金か？服か？確かに困るが、一番は食事だ。命に関わる。」

確かに　と、バーツは興味深げに聞き入っている。

シェスはシェスで、興味がある訳ではないが、聞いてやろう　な態度をとっている。

「あまり大差があるとは思わなかったが…。まさか和食があるとは…。」

和食？？と二人は聞き返す。

「米とは言わないかな。この白いやつと、味噌汁…このスープ、そして焼き魚。

まぁ、魚は見たこともないが。漬物もあるとは。これぞ和食。これは俺のいた世界の俺の国のオーソドックスな献立と同じだ。」

見るとは思わなかった祖国に似た料理を見て、少し興奮する玲斗。
二人が食べているのは、マフィンのようなパンのような物と、腸詰の肉…ソーセージと、生の野菜のサラダ。

「へぇ。じゃあ西国グラベスクの方の文化に近いのかしら？」

「かもしれないね。グラベスクは長く物理的に閉ざされてたから、他３国とは文化が大きく違うんだ。」

料理を見ながら、二人は文化の違う国について説明する。
召還されたこの国。東国イブリー。件の西国グラベスク。南国カラーディア。そして北のバルド。
この４カ国が、大陸最大の国家になる。
大陸には３０カ国が犇めき合っているが、規模も小さく衛星国家となっている国が殆どだ。

「凄く惹かれるな…行ってみたいんだが。」

「国交が確立されたとは言え、まだまだ遠いわね。ここは東国の中でも、東寄りだし。」

「無理じゃないけど、砂漠を越えて早くて１ヶ月。慎重に行けば２ヶ月はかかるね。」

行けない事はないが、難しいと語る二人。１ヶ月くらいならどうにかなりそうだが、と玲斗が言うと、

「何も無ければね。」

「えぇ。何も無かったらよね。」

「何もとは??何があるんだ??」
意味深な発言をする二人。どう言うことかさっぱり分からない玲斗は、疑問を口にする。
「このへんの砂漠は、風化の砂漠って呼ばれてるんだ。」
バーツは説明を買って出る。
「岩で出来た岩石が大陸中から集まった風に削られて、剣で覆われたような地形になってるんだ。歩けない程ではないんだけど…。」
「モンスターが多いのよね。逃げ道はいくらでもあるんだけど、それが逆に迷路みたいになってるの。あそこ。騎士試験に使われるくらいだし。」
「なふほど。だから、物理的に閉ざされていたのか。なら、なんでそんな国の料理が学校の食堂に出るんだ?」
当然と言うべきか、鋭いと言うべきか、玲斗は得た情報から新たな疑問点を挙げる。
「それは、この学校…いや、国だからかな。」
バーツは良く分からない返答をする。
どういうことだ?と、玲斗が先をうながすと、嫌味のない笑顔でバーツが、それはね。と続ける。
「この国。東国はね、別名『学院国家』と呼ばれるくらい学院があ

るんだ。国の政策で、学費が安かったり、幇助があったりで、就学率８割って実績を出してる。ちなみに他国が就学率３割程度かな。」

そこで一旦話しを区切り、水で唇を湿らせる。

玲斗としても、この間は話しを整理する事が出来て有難い。最初の頃と、バーツのキャラが違うな　　など、余計な事を考える余裕はあるが。

シェスは、やれやれといった表情で二人を見ながら、それでも茶々を入れず黙って聞いている。

「これだけの学校があり、レベルも高い。お陰で、最近では他国からの留学生を受け入れてるんだ。さすがに幇助とかは無いんだけど、かなり学費は安いからね。だから、留学生のために自国の料理を出し始めたんだ。」

そう説明し、満足そうな顔で食事を再開したバーツ。

パンっぽいものを千切りながら、

「今じゃ、他国の食事の方が人気あったりするんだけどね。」

と、バーツは周りを見渡した。

人種もバラバラ。食べているものもバラバラ。

確かにそうみたいだな　　と、玲も苦笑いを返した。

「バーツは、説明大好き本の虫君なのよ。」

突然。意地悪そうな笑顔でバーツを評する。

これには、玲斗もうっかり吹き出してしまった。

「虫言うなぁ～。」

バーツはさっきまでの勢いが嘘のように、うにゃぁとした反抗を返す。
おぉ。それがバーツだ。　と、玲斗が発言したのが最高潮の笑いを誘った。

「ちょっと、ココ座らせてもろてもエエかな??」

え?!と、笑ったままの顔で振り返った。

「なんや、自分らエラいおもろい顔してんで!」

そう言いながら　きゃっきゃ　と笑出した。
言われて気付いた3人は、同時に　はっ!!と声を上げ、一瞬驚愕の顔をした後、無理矢理に表情を元に戻す。
長い黒髪を赤い細めのリボンでツインテールにした小さい女の子が、食事のトレイを持って立っていた。
玲斗は、この少女を見て日本人?的だと感じた。身長は低く１５０ｃｍ程。色は白いが黄色人種寄りの肌の色。
中国系?韓国系?などとも思ったが、喋ってるいる言葉が何故か関西弁に聞こえる為、日本人にしか見えない。
バーツとシェスは、どうみても西洋風だ。シェスは身長が１６８ｃｍ。バーツが１７８ｃｍ。白人系の白い肌。
そんな容姿ばかりかと思っていたため、余計に呆けてしまう。

「で、ココ。座らせてもろてエエんやろか??」

「あ・・・。すまん。座ってくれ。」

玲斗が正気を取り戻し、座ってもらうよう促す。
二人に確認はとらなかったが、問題無いだろう。反応から察するに、まったく知らないようだが。

「で、自分ら。さっき西国やなんやゆーてたやろー！小耳に挟んで聞いとってんけど、面白そうな人らやから来てしもた！」

大きいが、ちょっと釣り目の金眼をキラキラさせながら、黒髪の謎の少女は話す。

「そ、そうなんだぁ。」

ハハハハと、乾いた笑いを返すシェス。

「見た感じ・・・西国の人??」

「せやでぇ！グラベスク人や。故郷の香りに誘われたっちゅーやつやな！」

続けてシェスが、見た目の特徴から出身を聞く。
正解だと言いつつ、ここに来た理由を話す。
それにしても、コテコテな関西弁だな・・・　と、玲斗は感想を抱きながら、見た目と同様に親近感を抱く。

「自分も、グラベスク人ちゃうの？」

謎の少女は、玲斗の方を向きながら問いかける。
しかし、玲斗はグラベスク人じゃないどころか、この世界の人間でもない。
あまり異世界から来た事を言うのも憚られる上に、正直、説明する

のもめんどくさい。

「いや、違うよ。血も混ざってるかもしれないが、良くわからない。片田舎から出てきた世間知らずくらいに思っておいてくれ。」

そういって適当に誤魔化す事にした。
この辺の常識を知らない事についても、不信感を抱かれないように、適当に暈して返答する。
謎の少女は、そうなんやぁ～　と、言っていて、納得したのかしてないのか解らない。

「まぁ、うちは生粋のグラベスク人やから、何でも聞いてやぁ～」

などと言っている。正直、どっちでも良かったのかもしれない。
とりあえず思考の外に外したようだ。
玲斗としては先ほどのパーツとの会話で、ある程度聞けたと言う事もあり、そこまで掘り下げるつもりもなかった。
しかしながら、少女は『聞いて聞いてオーラ』を醸し出している。
こういう目をされると、非常に弱い。悪い奴でもないし無碍に扱うのも気が引けた。

「グラベスクの事じゃないが、名前は何て言うんだ？　ちなみに、俺は玲斗。玲斗　天川だ。よろしく。」

「おぉ、せやった。まだ名乗ってもなかったなぁ。これはウッカリや。うちは、リン＝レイシン。リンちゃん！もしくは、リンリン！って呼んでなぁ～」

「私は、シェス＝コナー。シェスで良いわ。」

「僕は、バーツ＝ハント。バーツって呼んで下さい。」
誤魔化すように、玲斗は名前を聞き、そして自ら名乗る。
謎の少女が、かんにんな　などと良いながら、自己紹介する。
あまりのテンションの高さに言葉を失っていた、シェスとバーツの二人も会話に復帰する。
それにしても、自分をリンちゃんや、リンリンと呼ばせる意味が不明だ。
まだ扱いに慣れない３人。

「レイト。シェスに・・・バーツやな。覚えたでぇ！」

「あぁ、宜しく。リン・・・ちゃん？」

「宜しくね。リンリン」

「宜しくお願いします。リン・・・さん。」

やっと、自己紹介を終えた４人。
ちゃん　なんて、つけて女の子を呼んだ事ないぞぉ～～はずかしー！！！と、心の中で玲斗は絶叫していた。
そして、さん　と呼んだバーツに対して　ウラギリモノー！！と、チョップする。
この後も、それぞれの紹介や、他愛のない話をしながら親交を深めた。
主に喋っていたのは、リンちゃんこと、リン＝レイシンだったが。

リンは、グラベスク出身の１７歳。
留学生として、アスベール学院に来ている。
年次は次が５年次。

「１７歳！？１４、５歳かと・・・」

と、玲斗が言うと、プクーっと膨れるリン。

「この国の人からしたら、背ぇも小さいし子供っぽいかもしれへんけどな！！」

拗ねたように言うリン。余計に子供っぽく見えてしまうのは仕方ない事だろう。

「悪い悪い。ここの人たちに慣れすぎてた。」

玲斗は謝る。玲斗自体もかなりの長身。まだ玲斗は自分より大きい人とは会っていない。
いつもの事だった為、気にもしていなかったようだ。
その視線から見たリンは、余計に小さく、子供と大人が話しているように見えてしまうのも無理はない。
シェスがすらっとした高めの身長である為、余計比べてしまう。

「まぁ、グラベスク人は、基本的に身長は高ぁないしな。しゃーないわ。」

「可愛くて良いわよ！低い方が！絶対！！」

「いやぁ、うちはもっと大きぃになりたいわぁ！！」

何故か、熱くなるシェス。そして、対抗するようにリン。
これは、長くなるな　と、バーツと玲斗は二人で会話を始めた。
意識の外にある女性人の会話は、あーでもない　こーでもない　と

続いていた。

食事を終えた４人は、そのまま食堂に居座り話をしていた。特にする事の予定もなかったからである。
玲斗は、明日から学院の生徒として授業などに参加する予定になっていた。
そもそも、実習を行う為の期間として、授業自体が休講となっていた。
それが、明日、新年次の始まりと共に、開講される。
実習の期間は１０日間。玲斗が来て１日が今日で経っている。
明日は、開講と言っても、実習の結果報告と次年次の準備にあたる事になるらしい。

玲斗は、ジェリオットから何も聞かされておらず、どの課に入る事になるか解らない。
その辺については、「あの」学院長任せておけばいい。　とだけ言っていた。

「お～いたいた。さがしたぞーレイト。」

なんて良いタイミングで現れるんだ。と、玲斗は苦笑する。
はぁ。つかれたぁ　などといって、隣に座ったのはジェリオットだった。

「ちょっと用があるから、レイト借りてくぞぉ～」

他３人に告げると、周りの　何？　と言う疑問に答えるつもりもないのか、ジェリオットはレイトの腕を掴むと、半ば強制的に連れて行ってしまった。

「ちょ、痛い痛い。自分で歩きますからぁ」

玲斗の悲鳴にも似た声。
ジェリオットに制止を呼びかけているようだが、ズンズンと歩いていくジェリオットを止める事なく食堂から消え去ってしまった。

「何やったん？今の。」

「「さ、さぁ・・・」」

残された3人は、ぽかーん　と、玲斗とジェリオットが去って行った方を見つめていた。

第１０話　グラベスク（後書き）

こんばんは。こんにちわ。おはようございます。紅丸です。
ボコボコと、新キャラが増えております。新キャラ前線北上中であります。

リン「まいど～！！リンちゃんでーす！！どないやった。初登場やでうち！出番まで待ってられへんくて、ずっとソワソワしとってんから！！どこぞの影の薄い作者のせいやな！せやろ！ホンマもう、使えへんわ。ちゃっちゃと、うち出さへんやったら、ヒロイン不在やん！？ヒロイン不在のまま進行するんか思ってヒヤヒヤもんやで！！　あーでもない、こーでもないどぇおいじょｋｃあｓｆｗｇｑｓかｓｌｋ・・・・・。」
紅「えっと・・・もういい？」
リ「ちょ、まちぃや！まだ喋り足りひんで！！」
玲斗「良く喋るなぁ・・・それはそれで羨ましいな。」
バーツ「今回は、僕は頑張りましたよ！」
シェス「そうね。リン来てから、ほぼ発言無かったけど。」
リ「ちょ！！まちぃや！！！うち、初登場やねんから、もっと目立たせてぇな！！」
紅「シェス～～。火！！」
シェ「いいの？」
紅・玲・バ「「「うん。。。」」」
シェ「燃えて？？」
リ「ギャーーーー！！！！！」

バ「なんか、このあとがき、毎回誰か焼かれてるね。」
玲「人事だと思うと、面白いな。」
紅「なんか、何気に酷いね。玲斗。まぁ、これが本当の焼き討ちな

らぬ、焼き落とし。」
シェ「燃えろ！」
紅「ぎゃーーーー！！！さっきと勢いが違うーーー！！！」

第１１話　何の冗談・・・ですか・・・

玲斗はジェリオットに連行され、学院内のと一室へ連れて来られていた。

「んじゃ、入学試験するから。」

「え？？」

突然、ジェリオットに発せられた言葉に、いまいち思考が着いていかない。

入学試験？　と、頭上に「？」マークが出るような雰囲気で玲斗が説明を求める目をジェリオットに向ける。

「言ってなかったなぁ。まぁ、試験つっても、ちょっとした適性検査だから緊張するだけ無駄だぞぉ～」

「適性検査？何の適正を検査するんですか？」

「うちの学校は、魔法課・戦士課・補助魔法課があるからな。お前さんが、どこの課に入るか決めるんだ。」

なるほど。と玲斗が理解の意を示す。

もう少ししたら、担当教官が来るとの事で、部屋の四隅に置いてあった長椅子に二人で腰掛ける。

部屋自体は、２０ｍ四方くらいだろうか。部屋と言うよりは体育館と運動場を足したような感じだ。

室内だが、地面には土が入れられている。

「まぁ、力み過ぎるな。何も学んでないんだ。出来なくて当たり前くらいで考えておけばいい。」

「う・・・。そ、そうですね。魔法はおろか、残念ながら格闘技もやったことないです。」

ジェリオットは笑いながら玲斗の肩をバシバシ叩く。励まそうとしているようだ。

叩く力付くが一々重たいジェリオットの励ましを受け変な声を上げながら、玲斗は一抹の不安を感じていた。

魔法も使った事ない。

格闘技と呼べそうなのは、元の世界の学校でやっていた柔道と剣道くらいだ。

それだって、格闘技と呼ぶには甚だ稚拙な物だった。

（この世界に適応出来るのか・・・。）

考えていても気が滅入るだけだと、考えるのを止めた。

試験の事をジェリオットに聞こうと、下を向いていた顔をあげ、ジェリオットに問いかける。

「先生、具体的にはどんな試験なんですか？」

「俺は魔法課の担当だから、他のとこの課についてはよく判らん。」

「えっ！？先生、魔法課なんですか！？」

ジェリオットの分からない発言よりも、魔法課の教官であることに驚いた玲斗。

「お、今何気に失礼な反応したな？俺はバリバリの魔法課の教官だぞ！こう見えてもな。」

玲斗の反応にまったをかけるジェリオット。

筋骨隆々な姿を見て、魔法課の教官であるなど、一切思わなかった玲斗。

ごめんなさい　　と言いながら、それでもまだ信じられないと言った顔をしている。

「魔法課は、魔力の測定だ。道具は違う先生に持ってきてもらうから、今は出来ないがな。」

無かったコトにするように、試験の内容を話すジェリオット。

「まぁ、魔法については生まれ持った適性がかなりの割合を占めるんだ。これぱっかりはどんな奴でも調べてみないと分からんな。」

適性が無かった時のフォローを入れるジェリオット。

そんな気遣いに気付いた玲斗は、ジェリオットの横顔を見ながら自然と笑顔になる。

「意外と先生って優しいキャラなんですね。」

などと、茶化すように笑う。

照れ隠しに頬を掻くジェリオット。

ガチャ

音がなって扉が開く。
そして、３人の教官らしき人がゾロゾロと入ってきた。

「おっ、来たか。」

そう言いながら立ち上がるジェリオット。
そして、入って来た３人の横に並ぶ。
その中に知っている顔がジェリオットを含め３人。
一人目が、目覚めて最初に出会った、妖艶な金髪のデリア＝ハント。
二人目は、青い髪の色っぽいネェちゃん。このアスベール学院の学院長。アシュレイ＝フィリナース。
そして、ジェリオット＝アルバーム
残る見た事のない一人は、紫色の髪と茶色の目を持つ長身の男性。
大きいと言うよりは、縦に長いといった雰囲気だ。

皆同じ趣向の服を着ている。
紺色のロングコートに、長ズボン。コートの襟や裾や袖に金色の刺繍が施されている。
おそらく、学院の教官服のようなものなのだろう。
きちんと着ている３人とは対象的にジェリオットはコートのボタンを留めず、髪や目と同じオレンジの中着が見えている。
ジェリオットらしいなと、玲斗は見つからないように苦笑する。

「レイト君。お待たせしました。ここに来てもらった理由は、ジェリオット先生から聞いているわね？」

アシュレイが玲斗に問いかけながら、ジュリオット先生を見る。
玲斗が頷き、ジュリオットも頷く。
デリアは小さい声が妖艶さのある独特の声で、レイトちゃ～ん　な

どと言っているが、敢えて反応は苦笑に留める。
そんなやり取りがひと段落した時、並んだ教官の一人が話し始める。
紫髪の知らない人だ。

「今から適正検査を始める。まずは、私。戦士課担当のリアレス＝フォルマークが行う。」

凛とした姿勢と、低い声。
真っ直ぐ玲斗を見ながら試験の開始を告げる。

「お願いします。」

玲斗も、丁寧にお辞儀をしながら応える。
リアレスの放つ冷たく鋭い空気に当てられたような気持ちになる。

「戦士課は、文字通り剣や槍などを使用しながら肉弾戦を行う為の技術を高める事を主としている。好きな得物を選びなさい。」

「得物？どこに・・・」

得物…武器の類いはこの部屋には見当たらない。

「今から出す。」

そう言うと、リアレスは掌を自分の５ｍ程前の地面に向ける。
そして言葉を紡ぎ出す。

「大地よ紡げ　力を我に　汝は剣　盾となれ　調べは戦
数多の力」

不思議な調子を持つ言葉をだった。
リアレスが言葉を紡ぎ終わった瞬間、地面が隆起し始める。
その隆起した地面は、出ては消える小さい稲妻のような光を発している。

「アースクリエイト。」

最後にリアレスがそう言葉を放つと、隆起していた地面が同じ光を放ちながら元に戻って行く。
しかし、先程まで何も無かったその場所に、銀色の塊が転がっている。

「これが…魔法…？」

玲斗は、その光景を見ながら固まってしまっていた。
しかし、戦士課の教官が魔法を使って武器を作り出した事に疑問を覚える。

「疑問があるようだな。私は戦士課の教官を勤めているが、地と金の属性を操る事が出来る。魔法を近接戦闘に応用している。」

どうやら、疑問が顔に出てしまっていたようだ。
そんなの反則だろ　　と玲斗は、言いたい気持ちにもなったが、これがこの世界の常識だと飲み込む事にした。
しかし、そこにあるのはただの金属の塊である。
少なくとも武器には見えない。

「こんな塊をどうしろと？」

「手に取って、使用したい武器の形を思い浮かべてみろ。」

何の事か分からないが、問答を交わすより行動だ。と、銀色づくに光る拳より少し大きいかたまりを手に取る。

（これで武器を思い浮かべるんだったな…。何にするか…。何でも一緒か。武器なんて使った事ないし。よし。）

玲斗は得物を決めると形をイメージする。

（刃の長さは・・・１００ｃｍくらい。細くて反りのある形。刃には波紋。丸型の鍔。柄は・・・３０ｃｍくらい・・・っと。）

よし。と声を上げると、武器の名前を告げる。

「日本人と言えばこれだろ。俺の武器は・・・。　日本刀！」

最後、武器の名を告げる瞬間に語気を強める。

「おぉ～！日本刀になったよ。すげぇ～。」

日本刀の形に変形した塊。
自分の手にした日本に伝わる伝統の武器。
少し長すぎたかと考えるが、自分の身長とのバランスを考え、これでも良いな。と、しっかりと持ってみる。
長さからして、大太刀と言う部類になる長さだ。
それを目にしたリアレスは目を少し細めながら、その武器を見つめる。

「見たことのない武器・・・頼りない刀身の太さだが・・・美しい武器です。その趣味は褒めて差し上げます。」

だろ？と言いながら、玲斗もまじまじと日本刀を見つめている。

「私の獲物はコレです。」

と、さっきの一連の行動を繰り返す。
リアレスの手の中に現れたのは、長い棒だった。
長身のリアレスよりも長く、２m程ある。
銀色に輝く棒は、よく見ると細かく花のような意匠が凝らされている。

「さぁ、試験の開始です。」

そう言いながら武器を両手で構え、姿勢を低くする。
右足を前へ伸ばし、左足を曲げて、右前の半身に構える。
棒の先を地面すれすれの位置まで下げて動作を止めた。

対する玲斗は、構えなど知るはずもなく、剣道の時習った基本の正眼に構える。
少し長物の日本刀なのにも関わらず、そんなに重さは感じない。

（これも魔法の恩恵か？）

異様な軽さに抱いた疑問を押し込める。
こんなファンタジーな世界だ。考えるだけ無駄だなと、要らない思考を遮断する。

「どこからでも打ち込んで来て下さい。」

りアリスが玲斗を促すが、素人目にも隙など全く無い。

威圧的なオーラを放つリアレスに、玲斗は怯んでしまう。
持っている武器は、真剣。
リアレスの武器にしても、棒とは言え金属で出来ている。あんな物の攻撃を食らってしまえば、骨が折れるどころの話ではない。
これが試験で、手加減はあるとしても、怯んでしまうのは仕方のない事かもしれない。

「このままでは何時まで経っても終わりませんよ？私から行きましょうか？」

リアレスが玲斗を挑発する。
確かに、このまま二人ともが、まんじりともせず動かぬ状況が続いてしまっては、終わるものも終わらない。
玲斗は背中に冷たいものを感じながら、しかし、柄を持つ手を強める。

「くっ！」

苦しい呻きのような声を出しながら、助走を付け、飛び込みながら振り上げる。
最初両者の距離は、役５ｍ程開いていた。
助走の段階で変な違和感を覚え、飛び込む際、必死で向きを変え横に飛んだ。
殺気を感じたとか、打ち込まれるとか、そういった状況に対しての違和感では無かった。

「うわぁ！！」

悲鳴を上げながら、着地と同時にもう一度飛び上がり転がってしまう玲斗。

よくよく考えてみれば、玲斗は、この違和感を常にこの2日の間感じていた。

「くそっ！なんだ、この体！」

そう声を張り上げる玲斗。

対峙していたリアレスさえも、驚きの表情を隠せず、部屋の横で様子を見ていた3人も何が起こっているのか理解出来ない。

「どうしました。戦いの緊張感で、精神に負担が掛かり過ぎましたか・・・？」

試験とは言え、リアレスは本当の殺気を玲斗へ向けて放っていた。その為、それが原因で玲斗がオカシクなってしまったのかと心配する。

あくまで教官。その立場からすれば、これ以上の立会いは出来ないだろうと判断しなければならない。

「違う・・・違います。俺・・・動けるんです・・・。」

玲斗は自分の掌を身ながら、リアレスに届くか届かないかの小さい声をあげる。

「何を言っているのですか・・・？動ける・・・とは？」

リアレスも、玲斗の言わんとする事を理解しようと勤める。

「俺の体じゃないみたい・・・なんです。思っているより早く、思っているより強く動ける。」

「一時的な気分の高揚による、身体能力の向上でしょう？」

「違う。そんな次元の話じゃない。」

「は？」

玲斗が、自分の症状をより詳しく伝える。
それを冷静に分析するリアレスが、考察を告げるが、玲斗が否と答える。
まだ自分の手を握ったり開いたりしながら見つめ続ける玲斗。

「よし。なんとなく解ってきた・・・。先生。ちょっと見てもらえますか？」

「何を・・・　っっ！！」

玲斗が、見て欲しいと伝えた直後、大太刀を構えてリアレスに向い走り出す。
反応が遅れたリアレスが構えの体制に入るか入らないかのタイミング。
自分の目を疑う状況に陥った。

玲斗が視界から「消えた」のである。

次の瞬間、リアレスは、自分の肩に誰かの手が乗せられる感触を感じ冷や汗をかいた。

「何の冗談・・・ですか・・・」

リアレスの思考が停止する。

しかし、そこは伊達に戦士課の教官をしてるリアレスではない。
振り払うように、半回転しながら飛びのく。
「さっきの、見えましたか・・・？」
玲斗が、先ほどまでリアレスの肩のあった部分に手を置く仕草のまま
リアレスに問いかける。
「残念ながら。」
リアレスも素直に、玲斗の問いかけに答える。
「ですよね。俺、こんなに早く動けたの初めてです。今だってほら。」
そう言ったあと、軽く飛び上がったかと思うと、一瞬でリアレスとの距離を積める玲斗。
突然視界から消え、再度現れた時はリアレスの目の前にいる。
「恐ろしい身体能力ですね・・・。私じゃお相手出来ないようです。」
そう言いながら武器を下ろすリアレス。
周りで見ていた3人も、リアレスと同じく驚愕の色に染まっていた。
突然消えたり現れたりする玲斗。
遠めから見たら、手品でもしているようにしか見えない。
「試験終了です。」

リアレスの一言で、戦士課試験は終了する事となった。

第１１話　何の冗談・・・ですか・・・（後書き）

まいど、紅丸です。
今回は、ちょっとした戦闘シーン的なものがありました。
非常に不得手です・・・。
もっと、表現豊かに情景を書けるよう、もっともっと精進しなくてわ。

紅「どう思いますか、ジェリオット先生？」
ジェリオット「いやぁ、そんな事より、俺の光る液体知らね？」（第４話参照）
紅「駄目だ、この人・・・。」
バーツ「あの光る液体・・・何なんですかね。」
紅「さぁ。。。」
ジェ「今回の戦闘シーンは、ダメダメだな。俺が全然出てこないから。」
紅「真面目に答えないなら、答えるな！なんでダンベル持ってんの！アンタ魔法課の人でしょ！」
バ「ほんとだ、、、なんでダンベル・・・」
ジェ「次回！消えた液体の謎！そして、明かされるダンベルの秘密！！」
紅「勝手な予告するな！！逆に見てみたいわ！！！」
バ「次回、レイトの秘密に迫る！そして、入学試験の行方は！！？」
ジェ・紅「「結局、バーツな。そのポジション。」
バ「えへっ！」

※仮タイトルに第何話か記入するように変更しました。
一部修正も行っておりますが、誤字脱字が多すぎて修正しきれて

おりません。
読者の方々には、ご迷惑お掛けしますが、生暖かい目で見守って頂ければと思います。

第１２話　私達の愛ｓ・・・　レイト様

戦士課試験が終了した。
結果は合否ではなく、他の課の試験と併せて総合的に判断すると説明を受ける。
未だ、自分の身体能力を理解しきれない玲斗。
自分で、自分の体に何が起こっているのか解らない。
普通の行動をしている時は、いたって普通。しかし・・・

（動きたい！）

そう念じて動いた瞬間、４人の教官の目から玲斗が消え、部屋の一番奥の壁に手を触れている。
１０ｍ近い距離を一瞬で移動する。

試験後、何やら玲斗の方を見ながら話し合う４人。
教官の列に戻る際、最初にリアレスが深々と頭を下げたのは印象的だった。

「やはり、レイト君は普通じゃないのね・・・。」

アシュレイがレイトを見た感想を話す。

「みたいです。私もまだ未熟者とは言え、目で追えない速さ・・・いや、あれは速さなんて次元では無いように感じます。」

「俺にも見えなかったなぁ。今まで本気を隠してやがったのか？」

「あたいが診断した時にはぁ、そんな様子はなかったわよぉ？」

対峙したリアレスが、率直な感想を述べる。
続いてジェリオットが、玲斗を見ながら隠していたのか？と疑問を上げるが、玲斗を診断したデリアが否を唱える。

（うわぁ、なんか話し合ってるなぁ・・・。この世界の人の常識からも外れてるみたいだ。しっかし・・・）

玲斗が再度、動きたい！　と念じる。
とたんに、玲斗の目に映る世界がスローモーションのように感じる。
身振り手振りを交えながら話していた４人の教官の動きが、ほとんど止まって見える。
風は感じない。全ての音が低く聞こえ、低い音の耳鳴りのような感覚・・・。
この感覚に、一瞬顔を歪める。あまり気持ちのいい感覚ではない。
スローモーションになった世界の中を、自分は普通に走っていく。
そして、部屋の真ん中に立つ。
深い息を一つ吐くと、世界が元に戻る。

まだまだ使いこなせてはいない。
しかし、使う度に少しずつ理解していく。

（すごい力だ・・・。物理法則なんて完全無視してやがるなぁ。）

自分の感覚自体で言えば、世界がスローモーション・・・殆ど動いていない世界。
人から見れば、一瞬で離れた場所に移動していたりする。
自分以外の、自分に「触れているモノ」は、この力に影響されないようだ。
服の動きまで止まって、動くのに支障をきたす訳ではない。

（よし。ものは試しだ。　動きたい！）

動かない世界に入り込む。
そうして、徐に地面にしゃがみ込むと、一つまみの砂を拾い上げる。
指で拾った砂は、重いと言う事も別段なく、普通に拾い上げる事が出来た。
そして、拾い上げた砂を、調味料を入れる時のような動作で地面へと落とす。
玲斗の手から落ちた砂は、普通に地面へと落ちていく。
玲斗は、自分の手から離れたモノが、どういう動きをするのかを確かめていた。
砂は、当たり前のように落ちていく。
どうやら、手から離れた物も、普通の動きをするようだ。

（手から離れても同じ・・・か。これってホントに反則だなぁ・・・。）

そして、そのまま自分の右足の靴を脱ぐ。
拾い上げた靴を、ふわっと投げてみる。
投げられた靴は、手を離れても暫く普通に飛んで言った。が、玲斗から離れる事１ｍ程。空中でピタっと静止する靴。

（おおおお。止まった止まった。触ったもの全部ってわけじゃないんだな。なら・・・）

と、靴へ向いて歩く。
靴へ向かって歩くが、靴もどんどんと離れていく。投げた方向へ進んでいるようだ。

（止まるけど、止まってるように見えるだけで飛んでんだな。そういや、ちょっとずつ進んでるみたいだし）

この事から、投げたものの運動はそのまま生きるらしい事が解った。動きの制限がない距離は１ｍ程度。故に玲斗の動きは殆ど制限されない。

刀は１ｍ程度あり、玲斗のリーチも合わせると１ｍの範囲を出てしまうが、触れているから問題はないらしい。

（だいたい解った。でもこれ、ちょっと疲れるみたいだな・・・。）

多少の倦怠感を感じる玲斗。無制限で使えるわけではないようだ。

ふぅ　と息をひとつ吐き出す。

すると世界が元の動きを取り戻した。と、同時に飛んで行く靴。

周りを良く見ずに靴を投げていた玲斗は、しまった　と言う顔をした。

「あっ！」

「ふべらへっ！」

飛んでいった靴に顔面を捉えられた。当たった瞬間に変な声を出す。

他３人と玲斗の方を見ながら話していたジェリオットの顔面には靴が乗っている。

「あ・・・・・」

「レ・・・イ・・・ト・・・」

「・・・ぷっ！」

「あらあら」

「ほう・・・」

順に、玲斗・ジェリオット・デリア・アシュレイ・リアレス。5者5様の反応を返す。

「レイト・・・お前さん、何か恨みでもあるのか・・・俺に？」

「え、あ、う・・・ち、ちょっと実験をしてまして・・・」

「あら、ジェリオット先生に靴をぶつけてみる実験ですか？」

靴を載せたまま、呻くように文句を言うジェリオット。たまらず言葉につまりながら説明する玲斗。

ジェリオットからしてみれば、先ほどまで手の平を見ながら俯いていた玲斗から突然靴が飛んできたと言う事になる。

意地悪そうだが、しかし楽しそうに茶々を入れるアシュレイ。

デリアはお腹を抱えながらも、堪えてクスクスと笑いをこぼしている。

リアレスは、先ほど　ほう・・・と唸ったっきり、顎に手をあてて靴を見ている。

「ち、違っ！動きの有効範囲とか・・・そうゆーのを・・・」

玲斗が、堪らないといった表情で顔を強張らせながら、続ける。

うむ。　と言って、リアレスが先を促した為に、事の経緯を説明した。

「なるほど・・・。と、言う事は、ほとんどノーモーションで投擲が出来ると言う事ですね。」

「俺からすれば、普通に投げてますが。」

「しかし、私たちから見たら動きなどまったく見えなかったわね。」

リアレスが感心したように呟く。
アシュレイも、動きなど見えないし、その通りだと続ける。
笑っていたデリアが、笑いを堪えながら

「いたずらし放題ねぇ～。あたいも、それ欲しいわぁ～」

などと続ける。
悪戯したわけではないんですが・・・と、玲斗は苦笑いしながら答える。

「ま　わ　り　を　見　て　な　げ　ろ　・・・」

靴を右手に持ち、プルプルとしながら笑うジェリオット。

「ごめんなさい！！！」

大きな声で誤る玲斗。
ジェリオットはツカツカと玲斗に近づくと、ベシッと左手で玲斗の頭チョップする。

「うっ！」

苦しそうな声を上げる玲斗だか、そんなにまで強いチョップではな

く、頭に当てる程度だった。

「気をつけろ？」

「はい。」

これで和解になったようだ。

「フフフ。まぁ、おもしろい物を見せてもらった所で申し訳ないですが、レイト君。」

アシュレイが、笑いながら話し始める。

「試験の続きをしなくちゃならないわね。次は、デリア先生です。デリア先生、御願いします。

そういって、試験の進行を促す。そして、デリアを指名するアシュレイ。

指名を受けたデリアは、コホンと咳払いを一つ上げ。

「あたいはぁ、補助魔法属性の有無の検査しまぁす。」

と、試験内容を簡単に述べた後、一つウィンクをしてみせる。

女性の好きな普通の健全な男子であれば、ふらふらぁっとそれだけで堕ちてしまうような妖艶さだ。が、

「はい。宜しく御願いします。」

何のこと無い反応を返す玲斗。

女性が得意ではないと言う正確が、幸か不幸か、何の感慨もないよ

うだ。

「ほぉんと、つれないわねぇ～。まぁいいけどねぇ。じゃあ、手の平を見せてねぇ。」

促されて、玲斗は自分の右手を差し出す。

普通、属性は目や髪に表れた「色」で判別が付き、ほぼ、１０割の確立で的中する。

その為、普段は光や風、水と言った「癒し」や「付加」の力を持つ属性色を持たない者には、こういった検査は行われない。

異界から来た存在。規格外であり、この世界での物差しでは計れないとの判断をアシュレイが下し、すべての検査を行うようにしている。

「あぁら、ざんねぇん。癒しの力はぁ、ないわねぇ。でもぉ、付加の力はぁ・・・あるみたい。」

力のある魔法使い。デリアのような光の「加護」を持っているような者だから出来る。

そう言う類の検査方法とも言える。

掌を翳し、掌を合わせ、掌で読み取る。

怪我がないか診断したときの「読み取る」魔法。

無言（むげん）の発動でやってみせる。

「どうしました？デリア、貴女にしては歯切れが悪い返答ですね。」

アシュレイが、デリアの微妙な間を感じとり、デリアへと問う。

「付加のぉ・・・属性がわからないわぁ？さっきのぉ、力と関係が

あるのかしらぁ？ただぁ、被付加だけでぇ、与付加は出来ないみたいねぇん。」

「なるほど・・・そうですか。」

「どう言う事ですか？？」

玲斗は意味がわからず、二人のやり取りの説明を求める。

「属性の力を付加する力にはぁ、主に水、風、光、土・・・なんかがあるのねぇ。」

「そして、自分自身に魔力を付加させるのが、被付加。他人に付加させるのが与付加。」

デリアとアシュレイが説明をつける。
つまり、こういう事らしい。
玲斗は、さきほどのような力を発動して、自分自身に力を発動させる事は出来るが、他人に同じ効力を発揮させる事が出来ないと言うこと。
そして、さきほどの力の属性については、デリアでは解らないと言う事だった。

「なるほど。じゃあ、補助魔法課の可能性は薄いって事ですね。」

「そうなるわねぇ～。ざんねぇ～ん。」

本当に残念なのか、残念じゃないのか解らないような態度のデリア。
シクシクと嘘泣きまで始める。

「まぁ、時間もとってしまった事ですし、次に移りますね。ジェリオット先生。」

そんな事を気にもせずに、アシュレイが先を促す。

「はっはっはー。デリア嬢も学院長には形無しだなぁ～」

ジェリオットは、はっはっはーと、あっけらかんとした笑いを上げる。

「じゃあ、始めるか。　リアレス先生。あれ、持ってきてくれたか？」

「えぇ。コレですね。　どうぞ。」

ジェリオットがリアレスに対して、アレと言い、リアレスがコレと言ったモノ。

それは、透明な水晶玉だった。

何の色もない。無色透明の玉だった。

気泡の一つもなく、表面は綺麗に磨かれている。

直径１０ｃｍ程度だろうか。掌に載せるのに不便のないサイズである。

おぉ、すまねぇな　と言いながら、ジェリオットがその玉を受け取る。

「さぁ、レイト。こいつを、掌の上に乗せてみろ。」

そう言われて、ジェリオットが水晶をレイトに手渡す。

特別慎重そうに渡されたわけではないが、その見事な球体の美しさに自然と体が強張る。

「どう、、すればいいんですか？」

「あぁ、そいつはなぁ、持った人間の魔力の量と質を図るもんだ。デリア嬢みたいに俺は、手ぇ翳しただけじゃわかんねぇからな！」

がっはっはと笑いながら説明する。

「そいつを持って、言葉を紡げばいい。言葉は、『顕現せよ』だ。わかったな？」

「熱くなったりしません？」

「あぁ、その心配はねぇよ。属性の色に光るだけだ。色で属性。強さで量がわかるって代物よ。」

言葉を発したはいいが、熱くでもなられてはたまらない。

持てなくなるほどの変化はしねぇよ　と笑いながら答えるジェリオット。

どうだすげぇだろ　などと言っている。

「それでは、始めてください。」

と、アシュレイが促す。

「はい・・・。

『顕現せよ』・・・・」

その言葉を紡いだ瞬間、水晶玉から群青の光が発しられる。
ひかりとは思えない暗い色合いにもかかわらず、その光が水晶玉から強く発しられた。
そして、隙間を隙間を埋めるように、金色の光の線が、数十本動きながら場所を変えつつ出てくる。
動きがだんだんと収束するように遅くなり、光の線が纏まったかと思った瞬間。

「・・・・っ！！！！！」

これまでにないほどの光を放ち、そのに入る5人の視界を金と群青の光が埋め尽くす。

「こ、これは・・・・！」

アシュレイの声が聞こえた気がした玲斗は、しかし光の強さに耐え切れずに瞼を閉じる。

『 お久しぶりです。 私達の愛s・・・・ レイト様 』

そろそろ聞きなれたな と思う声が、玲斗の頭に響いた。
愛しい人 と言いかけて止め、レイトと呼んだその声に、人知れず苦笑を漏らす玲斗だった。

第12話　私達の愛s・・・　レイト様（後書き）

こんにちわ！紅丸です。
今回は・・・トントンと、サクサクと進むつもりで、何気に長くなってしまいました。
そして、やはりと言うか何と言うか、土日は更新しない僕であります。
ごめんなさい。　もう、こういうもんだ　と思って諦めて下さい。

シェス「土曜は大体暇してるじゃないの。」
紅「しっ！それは言わない約束です！」
バーツ「日曜も、昼まで寝てたよね。起きたと思ったらアニメ見てたね。」
紅「しっ！それも言わない約束です！」
玲斗「あげく、9時くらいから寝てたろ。」
紅「・・・俺のプライベート丸裸！？！？」
シェ「基本、暗いわ。家でずっといるなんて・・・。不健全の塊ね。気持ち悪い。」
紅「作者に対してえらい毒の吐きようですね、シェスさん・・・。」
シェ「さぁ、読者の皆様に謝りなさいよ！」
紅「えぇぇぇ！？　え、、、えっと・・・　ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ。」
（後ろで火の玉を構えているシェス）
バ・玲「「ひでぇ・・・」」

リン「まいどぉ～！リンちゃんです！！次回は、久しぶりのあの人の登場やでぇ！！そしてぇ、とり残されてる可愛いウチと、その仲間達（シェス・バーツ）の話しや！！」
紅「ちょ。。。勝手に決めないで。。。」

リン「ほんで、ちょっと毛色の違うキャラが出るらしいから、必見や！！」

紅「をま・・・　なんか、もういいや、それで　」

紅「御意見、御感想、お待ちしております。」

玲「作者の励みになるから、是非送ってやってくれ。」

シェ「日曜日も頑張れ！でもいいからね！」

バ「このコーナーって、誰か楽しみにしてるの？？」

紅・玲・シェ「「「さぁ・・・」」」

第13話　ようこそ、アスベール学院へ

―食堂―

「あれ・・・何やったん??」

「さ、さぁ・・・。」

「なんなのかしらね・・・。」

有無を言わさぬ勢いで去っていったジェリオットと玲斗。
玲斗は去って行ったと言うよりは、連行されたといった風情だったが。

時間は、玲斗が入学試験を受け、力に目覚め、水晶玉から光を放つ少し前に戻る。

「なぁ、あれって魔法課のジェリオット先生やんな?」

「そうだけど。」

「リンは、魔法課じゃないんだ?」

そうだと言うシェス。
言葉尻からリンが魔法課ではない事に気付くバーツ。普段のほほんとしたバーツだが、言葉の差異に敏感なところがある。

「うちは、戦士課や。バリバリの前衛やで！」

へぇとか、そうなんだ　と二人は反応を返す。

少し気になった事があったシェスは、リンに質問をぶつけてみた。

「戦士課って、男が８割ぐらいよね？筋肉バカっぽいのが多いような気がするんだけど、大変じゃない？」

「ちょ！シェス、失礼だよぉ」

当の戦士課の人間に、筋肉バカ呼ばわりとは、さすがシェスとしか言えない。

バーツは、そんなシェスの言動に冷や汗をかきながら注意を促す。

しかし、実際に問われたリンは、カラカラと笑いながら

「せやねん！もう、ホンマ参るわぁ。王城の騎士みたいな男前な男子がいてると思ってたのに、うちのトキメキを反せ！って感じや。」

８割を肯定しながら反す始末である。バーツとしては、そんなリンの反応にほっとため息を吐くばかりである。

その反応に気を良くしたシェスが、にっと笑う。

「よね！逆に魔法課はバーツみたいなナヨってした男子が多いのよねぇ」

「あぁ、なんか解るわぁ！それ！」

「ちょ、二人ともちょっと酷いよね・・・。」

落ち込んだ風なバーツを他所に、乙女談義に花を咲かせる二人だっ

た。
乙女モードに突入した二人の会話に、赤くなったり青くなったりしているバーツがいたとかいないとか。

ー試験会場ー

『お久しぶりです。』

（あぁ、久しぶり、ウェルム。つっても、1日ぶりくらいじゃないか？）

『愛しい人との逢瀬が、1日も無ければ人は久しく感じるものです。』

（あぁーあぁー聞こえねぇ～　ってか、ちょっとキャラが変わってきてないか？）

光に包まれた玲斗。群青と金の光の中、ウェルムが話かけてきていた。
言動が少し人間臭くなったような気がする玲斗は、好いんだか、悪いんだかなどと思っていた。

『名で呼ばれ、人と接する事で、特定の自我に引っ張られていっているようです。』

（難しい事は良くわからんが、そんなんで大丈夫なのか？）

『おそらく、これによる弊害はないでしょう。私達は数多の自我。

その中から一人抜けるだけの事。』

（そう言うもんなのか？ようは、ウェルムが、よりウェルムらしくなっるって事だな。）

『私・・・らしく・・・。えぇ。そうかもしれません。』

個人という自我に気付きつつあるウェルム。
玲斗との関わりが、少しずつかもしれないが、頭の中に響く声の主の存在を確かなものにしていっている。
それでもいいのか、少しだけ心配してみた玲斗だが、本人が問題ととっていないようなので　まぁいいか。などと思っている。
たった3度目だが、それは確かに輪郭を帯びた人の意識に似ていた。

（そんな事より、ピカーって光った後、光が収まらないんだが。）

『レイトの力があの水晶に引き出され、私が交信しやすくなりましたので、時間を止めておきました。』

（なんで時間を止められるんだ　とかの説明はもらえるのか？）

『・・・。お望みとあらば。ちょっと長くなりますが。』

（長くって、どんくらいだ？）

『2週間程度でしょうか。休憩を挟まずに。そもそも、時間と言うものは、普遍性のないものです。そこに介入する方法としては・・・』

（OK。スルーしよう。スルー。）

説明を行う時間として、ありえない単位の数字を言ったウェルムに、慌てて停止を呼びかける。

（そう言えば、さっき俺が使った回りが止まってるみたいにゆっくりになるのって、ウェルムが言ってた「力」か？）

『そうです。星の力。世界の理（ことわり）を司る力です。』

（やっぱり。なんか、みんな驚いてたけど、似たような事って普通は出来ないのか？）

『真似事なら、不可能ではありませんが、実行出来ないと思います。』

（どういうことだ？）

力について、少しでも情報を得ようとする玲斗は、次々にウェルムに質問を投げかける。

自分が使える力について、自分が詳しく理解していないと言う事は、自らの身を滅ぼす事になりかねないからだ。

ウェルム曰く、玲斗の力は、自然の法則や理から自分を外す能力なのだとか。

法則や理に縛られている人間が、無理に似たような事をすると体が持たない。しかも、莫大な魔力を必要とする為に発現する事も出来ないのではないか。との事だった。

『この世界で、もっとも自由な人間。それが貴方です。レイト。』

（チートみたいな能力だな。なんでもありって事じゃねぇか。）

『チート・・・？と言う言葉は解りませんが、なんでもありと言う事は間違いないと思います。』

チートと言う言葉に対し、疑問符を浮かべている少女の姿が見えたような気がした。

（いや、良い。わからなくて。しかしさ、ウェルム。俺、今の所、早く動くくらいしか取り得ないんだけど。）

ウェルムが言うように、自然法則を無視出来るわりには、確かに超速度で動く事しかしていない。

『それは、レイトが今の所、それしか望んでいないからです。』

（と、言うと、俺が望めば、もっと色んな事が出来るようになるのか？）

『いきなり多くを望めば、レイトの体に負荷が掛かり過ぎるかもしれません。魔力を引き出すのに慣れていない筈ですので。』

（使った後の倦怠感と眩暈は、そのせいか・・・。）

はい　と返事をするウェルム。続けて、この力は玲斗の想像を超える事は出来ないと言った。

（そりゃ、どう言う意味？）

『魔法とは、想像し、創造するもの。その為の詠唱や術式。ですので、レイトが創造出来なければ顕現出来ません。』

そう説明し、さっき顕現出来たのは、緊急的な精神的負荷が掛かった玲斗が強く望んだ為に可能になった。と、付け加えた。

『一度使えば、その感覚がある為に次回から容易に顕現出来るようになります。』

（そう言うもんなのか。しかし、俺に魔力なんてあったんだな。）

『生きている全てのモノに魔力は宿っています。生命の力。それが魔力と呼ばれています。』

ようは、やる気と経験か。　などと声に出さずに会話しているにも関わらず、ボソボソと呟く。

ふと、ボソボソと思考の整理をしていた玲斗が、ん？と何かに気付いたような声を上げる。

（今日は、やけに喋るんだな。）

正直、どうでも良い様な事だが、ウェルムが今まで言葉足らずだった為、気になってしまった。

『・・・。』

何かを考えるような気配が伝わってくる。それと同時に、懐かしい感覚が、ふと、玲斗を包んだ。

何処かで感じた事のある気配。知っている雰囲気・・・。しかし、それをハッキリとした形で認識出来ない。

（まぁ、いいや。色々教えてくれて有り難う。）

ハッキリとせず、消化不良になりかける思考を停止させる。

『いえ。　最後に、一つだけ・・・。』

（どうした？）

ウェルムが、先ほどよりも少しだけ真面目な雰囲気を放つ。

『この世界を知らないレイトの為に、私達の中の一つの自我が形を持って、貴方にお仕え致します。』

（ん？どう言うことだ？）

『私のように意識だけの存在ではなく、個としての存在が生み出されます。』

（いや、その説明も良く解らんが。）

『おそらく、明日、その意味が解ると思います。今日は、それをお伝えする為に語りかけさせて頂きました。』

（やっぱり、少し言葉足らずだな・・・。まぁ、明日になればってんなら、明日でいいや。また説明してくれ。）

『はい。　それでは、またお会い致しましょう。愛しい人』

何かしらのメッセージ。内容がよく汲み取れない発現で締めくくり、会話の最後を告げるウェルム。

心なしか少しだけ寂しい感情が玲斗に芽生えた。

しかし、また　と締めくくったウェルムの言葉に、心の声にも出さず　またな　と告げて目を閉じた玲斗。

「なんだよ、今の・・・・。」

「凄く光ったわねぇ～」

「まだ目がよく見えないですね。」

「・・・・。」

まだ目が開ききらない玲斗の耳に、ジェリオットとデリア。そして、リアレスの反応が聞こえる。アシュレイは、反応は返さず沈黙を守っていた。

「・・・これ、星の加護らしいです。」

慌てふためいた後の、少しの沈黙に耐えられず、玲斗が口にする。目を丸くして玲斗の方を見る3人。そして、また訪れた沈黙。

「「え・・・・・。」」

「やはりそうでしたね。」

「当たっちまったか・・・・。」

デリアとリアレスは、属性についてまで説明を受けていなかった。あくまで、アシュレイの見解であって、真実とは異なるかもしれない為、ハッキリするまでは説明を控えていたのだ。

ジェリオットは、目の事に気付いた最初の人物。そして、アシュレイの見解を聞いていたため、多少納得したようだ。

「レイト君。それがなぜ星の加護だと解ったのですか？」

アシュレイが、玲斗の方を向いて尋ねる。

「信じてもらえるかわかりませんが・・・。」

そして、事のなりゆきを説明する玲斗。説明が進むにつれ、驚きの表情に変わっていく面々。

今日だけで、どれだけの表情を見せればいいのか　と、ジェリオットはガハハと笑いながら玲斗の肩を叩く。

リアレスとデリアは、相変わらず黙って驚いた顔をしている。

アシュレイは、目を閉じて玲斗の話を聞いていたが、玲斗の話が終わると目を閉じ、玲斗の手をとった。

「ようこそ、我がアスベール学院へ。星の使途。」

そう言って、アシュレイは、玲斗の掌に小さなバッチのようなモノを置いた。

「今日から、貴方は魔法課の生徒です。よろしく。」

そう言って、ニコリと笑顔を玲斗に向ける。

よくわからない流れに、多少戸惑っていた玲斗だが、アシュレイの笑顔に、口角を上げ

「よろしく御願いします。」

そう言って、掌に乗せられたバッチを握り締めた。

ー食堂ー

一方、その頃。
食堂で乙女トークに花を咲かせていたリンとシェスの勢いに、そろそろ限界を感じてきたバーツが、コソコソと脱出を図る。
裕に3時間。
朝食が終わってもなお、食堂にて話し続ける2人。日は高く上り、お昼時となっていた。

脱出を図るバーツの首根っこをシェスが掴み、脱出を阻む。

「大体ね！バーツがそんなハッキリとしないナヨナヨとした態度だから、女の子にモテないのよ！」

「せやで！男は、勢いで　ガーーー！！　っと行かなアカンねん！！」

「あうあう・・・。死んじゃうよ・・・レイト・・・早く戻ってきて・・・。」

二人に、恐ろしい勢いで攻め立てられるバーツ。
両手を手の前で組みながら、中空を見つめ、何かにお祈りするように玲斗を呼ぶバーツ。

しかし、祈りも空しく、ここからさらに1時間この状態が続いた・・・。

第13話　ようこそ、アスベール学院へ（後書き）

現実って、世知辛いもんですね。　紅丸です。
1週間も更新出来ず、いつも読んで頂いている読者の皆様には、ご心配お掛け致しました。
幾分、元気と言うか生気と言うか、そう言ったものが磨り減っております。

シェス「忙しくても更新しなさいよ。」
リン「忙しい言うか、酷かったらしいな。」
紅「ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ。。」
シェ「なんか、トリップしてるわね。」
リ「会議が3日間あって、3時間くらい説教食らったらしいで。」
紅「ゴメンナサイゴメンナs・・・（ry」
シェ「やられてるわね・・・」
リ「やられてんなぁ・・・」
バーツ「解る。解るよ!!!紅丸さん!!」
紅「バーツぅ～」

抱き合う二人

リ「友情が芽生えてんなぁ・・・」
シェ「何か、予告と内容が違うとか、そう言う文句言う気なくなるわね・・・。」

バ・紅「ゴメンナサイ」

リ「うちも、無茶振りしすぎたわ・・・まぁ、エエか!次回!学校が始まります!以上!」

シェ「懲りてないわね・・・」

第１４話　ようこそ、アスベール学院へ２

―食堂―

「バーツ、大丈夫か？」

目を回しそうな勢いで、右のシェス、左のリンから機関銃のような言葉を浴びせられているバーツ。
一目見て、玲斗は心配の声を上げた。

昼を少し過ぎても、乙女モードが納まらない女性陣に挟まれ、バーツは心の底から音を上げていた。
そこへ、入学試験を終えた玲斗が戻って来たのだ。

「レイトぉ～」

小動物のような泣きそうな目で、ウルウルとレイトを見つめるバーツ。なるほど、イジりたくなるな。と、玲斗も僅かながらに二人の行動に同意しそうになる。

「どこ行ってたのよ？」

シェスが、玲斗に尋ねる。

「あぁ、何課になるか試験してたんだ。」

「すごくイキナリね・・・。」

「あぁ・・・。」

答えた玲斗も、ため息交じりのシェスの反応に、遠い目をしてしまう。

「なんや、自分、課も決まってへんかったんかいな？」

「レ、レイトは、編入生だからね。」

ツッコミを入れるリンに、すかさずフォローを入れるバーツ。

一瞬、固まった玲斗を見て焦ったバーツのナイスプレイだった。玲斗は、バーツの耳元で　ありがと　と、礼を告げる。バーツは、振り向いてニコっと人懐っこい笑顔を見せた。

「そうなんや！！で、何課になったん？」

「そうよ、何課になったのよ！」

二人に詰め寄られる玲斗。

「ま、魔法課・・・。」

「えーーー！うちと違う課やんかぁ！」

「同じね！！！私も魔法課よ！」

「よろしく、レイト。僕も魔法課なんだ。」

「あぁ、よろしく。リンは、残念だったな。」

方や、玲斗が魔法課に入った事を残念がり、方や喜びあう。

玲斗がいた世界の学校のクラス替えの時と、似たような遣り取り。
今、こうしている世界が違っても、同年代の友人達との関係は、どこに行っても同じなんだな　と、感慨深く色めき立った3人の姿を見ていた。

そのまま、食堂にて昼食を終えた4人は、購買部に来ていた。雑貨や必需品、生活雑貨などが売っている。

「これは、学校の購買部として、どうなんだ・・・」

玲斗は、その光景を見て呆気にとられた顔をしている。
所謂、大型のショッピングモール。それが、玲斗の頂いた感想だった。

「この学院の購買部は、確かに大きい方だけど、他所の学院も似たようなものよ。」

そうシェスに説明され、再度驚く。

「大体の学院が、寮に生徒を住まわせているんだ。ほぼ必然的に一人暮らしになるから、ある程度のものが揃う、こういったシステムになってるんだ。」

バーツが補足をあげる。

「つまり、学校から一歩も出ずに生活出来るってことか・・・。」

「実際、1年くらいなら学院から出ない生徒なんて、ざらにいるわよ。」

1年出ずに居られると言う事は、ずっと出ずに居られると言う事と同義だ。

実家はどうすんだよ！　と言った玲斗に対し、バーツが冷静に答える。

「実家か・・・。まぁ、年に1回くらいは帰るよ。大体、みんな離れた所から来てるから、帰るだけでも大変なんだ。だから、そこまで無理して帰ろうとする人もいないね。」

説明を聞いた玲斗だが、それでも納得しかねると言った表情を崩さない。

家族と言うものを、ちゃんと知らない玲斗だが、だからこそ家族と言うものが有るにも関わらず、疎かにする行為には賛同出来なかった。

「家族は共にいないと駄目だ・・・。」

少しだけ寂しそうな表情を見せた玲斗に、少しだけ焦ったシェスが、先を急かす。

「ほらほら！ボサっとしてないで、さっさと歩く！」

なぜ、購買部にいるかと言うと、晴れて学院の生徒になった玲斗の必要なものを購入する為だった。

あらかじめ、必要なものを購入する為のお金は、アシュレイから手渡されていた。

「制服も買わなきゃね。」

忙しくなるわよー！と、シェスは腕まくりしている。
何となく。何となくだが、玲斗は冷や汗を流さずには居られない。

学院では、基本的には制服を着用する。その制服は課によって色分けされていた。
玲斗は、先ほどの食堂で、制服の説明を受けていた。

群青に黒い装飾が戦士課。
白に金の装飾がされているのが、補助魔法課。
そして、魔法課の制服は、黒に暗めの赤い装飾が施されている。

普段着は、大分素朴な感じとは言え、玲斗がいた世界と殆ど変わらない。
ジーンズのようなモノや、Tシャツのようなものがある。

シェスは、黒い膝丈くらいのマーメイドスカートを履いている。上は白に、黒のボタンのシャツ。その上から大きいバックルのベルトをしめている。足元は素朴な雰囲気のブーツだ。首から長めのネックレスが下がっており、トップに赤い石がはめ込まれた銀色の趣向の凝ったデザインのものだ。左手首には、銀色のブレスレットがあり、表面には文字のような造形がある。
バーツは、ジーンズのような生地の黒いズボンに、ゆったりめのTシャツを着ている。靴は、少し高さのある厚底のローファー。黒い皮紐のチョーカーをしており、先端には琥珀のような金色の石が無造作にぶら下っている。ブレスレットはしていないが、人差し指に金色の指輪をしており、これもまた、文字のようなデザインが施されている。
リンは、チャイナドレスのような長いスリットの入った赤い服を着

ている。その下に、黒いスパッツを履いていた。手首にはドレスと同色のシュシュをつけている。

「ほな、まずは制服やな！レイトはデッカイから、早めに頼まんと仕立て遅なるしな。」

「そうね。まずは、じゃあ・・・あその服屋ね。」

そう言いながら、リンとシェスは、自分の買い物をするわけでもないのに先へ先へと進んでいく。

バーツと玲斗は、多少圧倒されながら二人の後をついていった。

「おばちゃーん！制服見せて～！」

「おや、シェスちゃんかい。また制服破ったのかい？」

「ち、違うわよ！転校生の制服買いに来たの！」

シェスが、店の人を呼ぶと、恰幅のいい女性が現れた。はっはっはと、威勢の良い笑い声を上げながら問答する二人。どうやら、シェスはよく制服を破く・・・らしい。

「すいません。俺の制服なんですけど。」

「あらあら、また、大きいねぇ。ちょっと待ちな。既製品のサイズじゃ合わないだろ。」

そう言いながら、裏へ戻っていく女性。そして、ゴソゴソと物音がした後、再び現れる。

「コイツかねぇ。」
そう言いながら、白と群青と黒の制服を持ってくる。
すべて、玲斗でも余る程の大きいサイズの制服だった。
「えっと、コレです。」
そう言いながら、黒い制服を指差す玲斗。
「あら、魔法課かい？わたしゃ、てっきり戦士課かと思ったよ。」
驚きの声を上げ、他の二つはそのままに、黒い制服を持ち上げる女性。
そして、仕立て台の上にそっと置き、そこにあった巻尺を手に取る。
「それじゃぁ、サイズ計るよ。仕立て直しになるからね。シェスちゃんみたいに、しょっちゅう破かないでおくれよ？」
はっはっは　と、笑いながら、しかし手際よく採寸を始める女性。
「もう！余計な事はいいから！」
「うちでも、半年は破かへんで！まぁ、戦士課の制服は丈夫やけどな。」
「リンまで！」
はっはっはと、遣り取りを聞いていた女性も笑う。

「シェスちゃんは、制服を焼いちゃうからねぇ。一応魔法耐性のある生地なんだけどねぇ。」

この店では、シェスは結構有名人らしい。よく知った誼か、ちょっとキツめの冗談を言い合う二人。

しまいには、この店、燃やすわよ！などとシェスが言って、バーツが止めていた。

一通り、採寸が終わり、女性の手が止まる。

「よし。大丈夫だよ！大きい仕立てだから、少し時間がかかるねぇ。その間、その辺ブラブラしといで。1刻くらいで出来上がるからね。」

そう言いながら、仕立て台の前に座り、大きな制服の裾の加工を始める。

「すいません。御願いします。」

「んじゃ、次！次！」

お礼もソコソコに、シェスに促されるまま店を出る3人。

「なんで、ほんなに急ぐん??」

「いいの！」

そんな遣り取りを交わす二人に、バーツと玲斗は苦笑いを浮かべるのだった。

他に必要と思われる筆記用具やノートなどを買い揃えた４人。何だかんだで、シェスやリンまで大量の買い物をしていた。玲斗やバーツまでその荷物を持たされていた。

「おい、俺の買い物じゃなかったのか??」

「「女の子は、買い物が好き　なの！・やねん！」」

「左様で御座いますか。」

こういう時の女性には逆らってはいけない。そんな事を思わせる気迫を感じた玲斗は口を噤んだ。

そして、一向は、最初に訪れた服屋まで戻ってきていた。

「ピッタリのサイズに仕上げたからね。」

そう言いながら、征服を玲斗に手渡す女性。

「着てみなさいよ！」

「せやで！着てみぃな！」

二人には逆らわない。今日は。　と思っていた玲斗は、素直に従い試着室へと入る。

形としては、丈夫な素材のズボン。裾から膝程までに赤い刺繍が入っている。上は、学ランに似た詰襟のような形の服だが、胸と左右のポケット、袖と襟の一部に赤い刺繍が入っており、手首のボタンは無い。

試着し終わると、更衣室から出て行く。

襟のところに小さい穴が開いている。
「あら、似合うじゃない！」
「ほんまやなぁ。意外やぁ～」
女性陣に褒められて、少し照れくなり頬を掻く玲斗。
「この、襟の穴は何なんだ？」
「あぁ、課証を付けるんだよ。もらわなかった？バッチみたいなやつ。」
「なるほど、コレか？」
「そうそう。それ。」
先だってアシュレイから渡されたバッチのようなものを見せながら、バーツに確認する。
どうやら、課によってデザインが違うようだ。
属性によっても、色が違うんだよ　と、バーツが説明する。バーツが見せてくれたバッチは上半分が金色、下半分が水色をしていた。
持つものの属性が、勝手に現れるらしい。
玲斗の持っているバッチは、群青色。そして、小さな金色の粒が散りばめられている。
「レイトの目みたいに綺麗な色だね」
「ほんと・・・こんなの見たこと無い。」

「レイトの目、鋭いけど、色は綺麗やねんな！」
まじまじと見てくる3人に、居たためれなくなり、すぐに更衣室に引っ込んで元の服に着替える。

「さ、今日は明日から学校だし、晩御飯食べたら解散ね！」
シェスの号令の通り、食堂にて夕食を軽く済ませた後、各々自室へ戻っていった。

明日から学校が始まる。そんな期待に少しだけ胸が高鳴る。
知らない世界の知らない文化。知らないことだらけだ。
不安も尽きないが、シェスやバーツの存在のおかげで、幾分かマシと言うものだった。
玲斗は、軽くシャワーを浴びると、布団に入り目を閉じた。明日への希望を抱きながら。

翌朝。
玲斗は、シェスとバーツに迎えに来てもらい、3人で学院へと向かった。
1学年に1クラスしかなく、課が同じで、学年が同じであれば必然的にクラスメイトになる。
学院長の計らいで、シェスとバーツの学年へと編入する事となっていた。

一通り、転校生が通らなければならないイベントをこなす。職員室に挨拶をしに行き、担任がジェリオットで驚いてみたり、一緒に行

った教室で自己紹介させられたり。
滞りなく、一連のイベントは過ぎていった。
そして、始業日の為、講義も無く早く寮へ戻れると考えていた玲斗。
何もなく一日が終わる予定だった。

「どうしたの？お兄ちゃん？」
玲斗の事を　お兄ちゃん　と呼ぶ少女が、玲斗の目の前に立っている。

「あぁ、いかん。緊張で頭が可哀想な事になったみたいだ。」
驚きを隠せず、異世界に来たと言うのに冷静さを保っていた玲斗からすれば、この狼狽っぷりは、見たことの無い珍事であった。
玲斗と少女を交互に見て驚きまくっているシェスとバーツ。
そして、しばらく思考を停止していた玲斗は、その少女へ語りかける。

「どうして、お前がココにいる・・・。　玲華。」

第１５話　問題大有りでしょう！

「どうしてココにいるんだ。　　玲華・・・。」

お兄ちゃんと呼んだ少女に対し、玲斗が言葉を搾り出す。

「私は、レイカじゃないよ。　　ウェルム。」

ぱったりと出くわした少女は、いきなり玲斗の腕を掴むと、お兄ちゃんと呼んだ。

玲斗は、自分の事を兄と呼ぶ人間を一人しかしらない。

「ウェルム・・・だと・・・。お前が・・・？これは冗談か？それとも・・・、俺を怒らせたいのか？」

「どっちも違う。でも、この姿になったのは、玲斗の中で一番大きな存在だったから・・・。」

目の前の少女。昨日、ウェルムが言っていた事を思い出す。

幾分、悲しそうな表情で俯いた少女。

玲斗は、玲華の姿をしたウェルムを睨みつける。しかし、玲斗の中で一番大きな存在と言う言葉を聞き、少しハッと

したような表情になるも、それを隠して目を逸らす。

いきなり、玲斗に対し兄と呼んだせいで、呆けてしまっていたシェスとバーツの意識が次第に戻る。

「あんた、こんな小さい子に何言ってんのよ！」

意識を取り戻したシェスが、玲斗を問いただす。

「いいんです。私が悪いから・・・。」

少女が泣きそうな表情で静止を呼びかける。
話の筋が、全く読めていないシェスは、喉まで出ていた言葉を飲み込まざるを得なかった。

「お前が、アイツの言っていたウェルムか・・・。」

「はい。あのウェルムと殆ど同人格だと思ってもらって構いません。」

「よりにもよってだな・・・」

はぁ、と大きくため息をつく玲斗。
二人だけの会話が繰り広げられる。
シェスとバーツは完全に蚊帳の外となってしまっていた。

「アイツは俺のところに遣わせるとか言ってたな。説明は受けてないんだが。何の為だ・・・？」

「この世界を知らない貴方をお助けする為に・・・。そして、貴方をお守りする為に。」

遣わされるとか、お助けする為とか、お守りする為とか、ただ事ではない話をしている二人。
すっかり二人の頭の上には？マークが飛び出してしまっている。
ふと、二人の様子に気付いた玲斗が、この二人なら言っても問題な

いだろうと判断し、説明する。

「・・・と、いうわけだ。」

「なるほど・・・。俄かには信じがたい話だけど。」

「そうね。でも、この世界に来たのって、私達のせいじゃなかったのね？」

バーツとシェスが理解を示す。

「原因は世界にありますが、引き金を引いたのはお二人です。」

やっぱり、それはそうなのね　とシェスも幾分かトーンダウンしてしまう。

「その事については、俺も望んだ事だからと言っただろ？気にするな。」

トーンダウンしたシェスに、玲斗は声を掛ける。

わかってる　と小さく呟くシェス。普段は元気なだけに、効果は絶大だ。

「って言うことは、ウェルムは、レイトに仕える従者ってこと？？」

「はい。その通りです。」

「いや、ちょっとマテ。俺はそんなのは望んでないぞ！」

バーツが冷静に確認すると、ウェルムは同意を示したが、玲斗が待

ったを掛ける。
そもそも、あれは一方的な遣り取りだった。玲斗の意思の確認は、仕える者が行くから。と言う事後報告的なものだった。その場では、適当に了承の意を示してしまったが。
「話は通してあると思っていたのですが・・・。」
「あれは、通すと言うより、報告しただけだろう・・・。まったく、自我が芽生えたかと思ったらこれか。」
一人ごちる玲斗。
「言い忘れておりましたが、私は魔法課に転校生としてここに来ました。」
確かに黒い制服を着ている。
「魔法課じゃ見なかったぞ？」
玲斗が疑問を口にする。
「何分急だった為に手続きが遅れました。明日から同じクラスになります。学院長には詳しい事情をお伝えしておりますので。」
突然現れたこの少女に、玲斗についての色々な説明を受けた学院長の狼狽っぷりが目に浮かぶ。
まったく、どんどん話がややこしくなるな　と、遠い目をする玲斗。

「と、とにかく。仕えるとか言うのは無しだ。クラスに来るってのは仕方がないが。」

瞬間、ウェルムの表情が明るくなる。
否定され、追い返される程の雰囲気だった為、安堵の息をつくが、それでもまだ了承を得ていない事があった。

「私は、使える為だけにココに来ました・・・。ご迷惑なのでしょうか？」

小動物の目には弱い。そう気付かされた玲斗。

「あーもう！迷惑とかじゃなくて・・・。友達でいいだろぉ？」

「いえ・・・それでは・・・」

「まだつべこべ言うなら、帰ってもらうぞ！」

「あう・・・それは困ります・・・。」

「なら、仕えるとかは無しな。シェスやバーツ達と同じでいいから。」

従者とか、仕えるとか仕えないとか、そう言うキャラじゃない。と玲斗は最後に強調した。

「わかりました・・・。」

―学院寮―

「じゃあな！」

「またね！」

「じゃあね！」

「今日はお騒がせしました。」

玲斗、バーツ、シェス、ウェルムの順に、四者四様の挨拶を告げ、手を振りながら分かれていく。

学院寮は、基本的に1人部屋。学課と、学年とで分けられている為、殆ど場所は変わらない。

それでも、人数が多いため階の違うシェスとバーツは離れて言った。

どうやら、ウェルムは玲斗と同じ階のようで、まだ玲斗の後ろを小さい歩幅ながら、置いて行かれまいと早歩きでついてくる。

やがて、玲斗の部屋の前まで辿りついた為、ドアノブに手を掛けながら後ろを振り返る玲斗。

「じゃあ、俺の部屋ココだから。」

「はい。」

そう言って、鍵を開け中に入る玲斗。そして、その後から入ってくるウェルム。。。

「ちょっとマテ。」

「はい？」

おかしいおかしい。と、玲斗はウェルムの行動に待ったをかけた。
心底不思議そうな表情で、玲斗を見上げるウェルム。

「ココ、俺ノ部屋。ＯＫ？」

「はい。存じ上げております。それが何か？」

いやいや、噛み合ってないから。と、額に変な汗を流す玲斗。この世界で出会っていない、天然系のキャラか・・・

などと思いを余所へ飛ばして現実逃避を計ろうとするも、はぁと息を吐いて現実を直視する。

「なんで、入って、来るのか、聞いてるんだ。」

節々で区切りながら、伝えたい事を強調してウェルムに必死に伝えようとする玲斗。

「ですから、私はレイトにお仕えする為に来たので、同部屋でと、学院長には話しを通しています。あ、レイト・・

・」

学院長に　くらいのタイミングで、部屋を飛び出す玲斗。
そして、その後に続くウェルム。

「待ってくださいぃ〜〜！！」

編入生として、ただでさえ目だっていた玲斗が、女の子に追いかけられていた。しかも、その子も編入生。それを目撃していた魔法課の生徒の間で、遠くにまで来た彼氏を追いかけてやってきた女の子と、それから逃げていた男。として、噂になったとか、ならないとか。

ー学院長室ー

「学院長！」

「あら、レイト君。どうしたの、そんな大きな声を出して。」

入ってくるなり、大きな声で学院長を呼びつける玲斗。どうしたの？と何事かさっぱり解らないと言ったような反応を見せる学院長、アシュレイ。

「どう言う事ですか！」

「あら、何の事かしら？」

ちょっとしらばっくれているような雰囲気を隠そうともせず、アシュレイはそれでも、何の事？と悪びれもせず答え

る。
そうこうしているうちに、ウェルムがおいつき、学院長室に入ってくる。
「レイト、どうしたのですか？」
「コイツの事です！」
「あら、ウェルムちゃん。こんばんわ。」
「こんばんわ。学院長。」
どうしたのか　と問うウェルムを指差し、若干強めの声色で玲斗はアシュレイに問う。
しかしながら、ソレに少しも反応を見せず、ウェルムとアシュレイは挨拶を交わす。
「で、どうしたのレイト君。」
「いや、だから・・・。何で俺の部屋にコイツも住む事になってるんですか！」
「嫌だったのかしら？」
「嫌・・・なんですか・・・？」
「ちょ・・・」
アシュレイの言葉に、ビクっと肩を振るわせたウェルム。そして、

涙を溜めて小動物のような眼差しで玲斗を見上げる。これには、玲斗も言葉を失った。

「嫌とか、そう言う事じゃないでしょうが！」

「あら、そう？でも、話を聞く限り、問題ないんじゃないかなぁと。」

「問題大有りでしょう！」

「問題・・・なんですか・・・？」

ウェルムの小動物の眼差し。それは、玲斗の妹、玲華と同じ顔。それは反則だろう　と、玲斗は苦笑いしか出来ない。

「それにね、玲斗君。急遽受け入れるって言って、突然2つも部屋は用意出来ないのよ。そもそも、編入生なんて殆ど居ないんだから。」

「でも！何か方法もあるでしょう！俺の部屋に来なくたって！」

「外で寝かすの？ウェルムちゃんを？」

「私・・・そんなに迷惑でしょうか・・・。なら、外で・・・」

「あ”～～！もう！ちょっとマッタ！」

なぜ、そうなるのか　と、玲斗は自分でも驚く程深いため息をつく。
この二人のペースに飲まれちゃダメだ　と言い
聞かせる。

「まず、ウェルム。その目をやめろ！そして、学院長、さっきから
ちょっと悪者顔してますよ！」

「はい・・・」

「あらそう？普段からこんなもんよ？」

話を整理する為に、話題をひと段落させる。
はい　と返事しながらも、それでもまだ儚げな表情をするウェルム
を見て、ココに来て何度目になるかわからないた
め息をつく玲斗。

「シェスの・・・シェスの部屋に住まわせるか、俺をバーツの部屋
にうつして下さい。」

「え・・・」

「えぇ～～～」

二人とも、同じ語で反応を返すものの、その意味合いには多きな違
いがあった。

「学院長、なんでそんなに嫌そうな反応を・・・」

「めんどくさいし、面白そうだったから」

出たよ　と、ため息を吐く。俺が大阪人なら、なんでやねん　と言ってしまうだろう。などと思ってしまう。

玲斗は薄々感づいていた。アシュレイの思惑に。ただ、こんなにデカい学院の長が、そんなハズがないと思おうとしていた。

が、しかし。

アシュレイは思った通りの人だった。いや、むしろ、この予想は外れて欲しかったと思う玲斗。

「とにかく、お願いします。」

「はぁ・・・。まぁ、ある程度は予想しておりましたが。今日は二人とも部屋に帰っちゃってるし、準備もあるだろうから、明日二人に相談して決めなさい。」

「今日は！？」

「今日くらいいいじゃない。」

「レイト・・・私からもお願いします・・・。」

なんなんだ・・・と玲斗はため息をつく。いったい、本当に何度目だろう・・・。それを考えていたら、またため息が出そうになるが、それだけはなるものか。と、グッと堪えた。

「今日だけだぞ・・・」

「よかったわ。レイト君が良い子で。先生は、貴方達の事、応援してますからね。」

「有り難う御座います！レイト！！」

二人とも、とても素敵な笑顔だ。

素敵すぎて、直視できないよ・・・なんだろう、目から水が出て来たぞ・・・？　ハハハと、乾いた笑いを浮かべながら、誰も居ない中空を見据えたまま固まってしまった玲斗。

いいんだ。いいんだ。　と、心の中で繰り返し詠唱する。気にする事はない。俺はそもそも、何もしない！

「あ、今、ちょっと如何わしい妄想したでしょう？」

ニヤリと、アシュレイが釘をさしてみる。

「え・・・それは・・・。でも、私、レイトなら・・・」

「あぁぁぁぁぁぁぁぁ！もう！そんな事ないから！」

頼むから、拒めと。　そう玲斗はコメカミを抑えながら必死で否定する。

完全にもてあそばれている。ひょっとすれば、ウェルムも共犯かもしれないなどと、邪推せずにはいられない。

次の日の朝、目の下に墨で書いたような濃いクマを作って元気なさげに登校する玲斗と、何故か楽しそうに後ろから

ついていくウェルムの姿が見られたとか。

でも、それは次の話・・・。

第１５話　問題大有りでしょう！（後書き）

こんにばんはよう！紅丸です。
え？どう言う意味か？って？
こんにちわ　こんばんわ　おはよう　を足してみました。
あ、どうでいい？申し訳ない。

って、事で（どういう事？）第０章～出会い編～終了致しました！
次話から、第１章の始まりです！やっと、本筋です。
０章は、出会い編と銘打って、たくさんの人と出会ってもらいました。
登場させたかったメンツは、みんな出しておきました。
キャラの濃い人から、薄い人まで・・・薄い人なんかいたか・・・
とにかく、これからシリアス有り、ほのぼの有り、コメディ有り。
そんな沢山盛り込んだ、楽しい世界を作っていけるように、作者として、全力を尽くさせて頂きます。

そんなわけで、ココまで読み進めてくれた方々。有り難う御座います！
そして、これからも、何卒、宜しくお願い致します！！！

第1章～アスベール学院～　プロローグ

「与太話・・・くらいにしか思ってなかったわ・・・。」

「そうですね・・・。」

「でも、あの子の次に来た子の名前・・・。殆ど間違いないわね。」

「しかし、良かったのですか？簡単に受け入れてしまって。」

「あぁら、構わないわよ。面白そうだもの。多少の面倒は引き受けるわ。」

「ハハハ・・・」

薄暗い部屋の中。部屋を少しだけ照らすのは、机の上に置いてある小さな照明だけだ。

女性と男性。二人の声だけが聞こえてくる。しかし、薄暗く黒い輪郭しか捉えられない。

若干落とし気味の声量で二人は密談を交わす。

最後に男は乾いた笑いを上げて、頭をポリポリと掻く仕草をする。

「それじゃ、オレはこれで。」

「えぇ。何か動きがあったら教えてちょうだい。」

「はい。」

女性は、男性に指示をすると、簡潔で最低限の返事が返ってくる。

そして、男性は部屋を出ていった。

「フフ。本当・・・。年甲斐もなくワクワクしちゃうわね。」

一人、そう呟くと、机の上の照明に触れ明かりを消した。

「ちょ、お前ついてくるなって」

「いえ、私はレイトにお仕えしなければならないので。」

「お仕えしなくて良いって言っただろう！」

「それでは、私の存在意義が無くなってしまいます！」

ウェルムが魔法課第５学年の一員になり１週間。
講義も始まり、それなりに学生らしい生活になり始めた頃。
この遣り取りは、魔法課の名物になりかけていた。

西洋風の見た目なアスベール学院の学院生の中にあっても、ある程度目立つほどに大きい玲斗。
色白で、珍しい黒髪と、何とも形容し難い瞳の色を持つ少年は、飛びぬけて目だっていた。
一方、ウェルムに至っては、黒髪黒眼。闇の加護と呼ばれる強い属性色を両方に帯びている。色白で慎重は１５５ｃｍ程度。小さく見た目も可愛いと言って差し支えのない容姿に、男子生徒の過半数が興味を持たずには居られない。

始めこそ、目つきがキツく若干強面の玲斗は、奇異の目と好奇の目。
そして、多少の畏怖の目を受けていた。
それ自体には慣れていた玲斗。しかし、四六時中ウェルムが玲斗の後を追いかけている姿を目撃される度に、うっすらとした殺意を感じ出した頃には、若干の危機感を覚え始めていた。

「普通の友達で良いって言っただろ？」

「でも・・・・。」

「ほら、もう教室だから。」

「はい・・・・。」

渋々と言った表情で自分の席へと向かっていくウェルム。
朝から深いため息をはく玲斗。最近、ため息をはかない日あったっけな　と、悲しくも儚い目で遠くの空を見つめている。
空は元の世界と同様に、一つの太陽と青い空。白い雲が山々の向こう側へと流れていく。
小鳥の囀りは聞いた事のない音色でも、姿形はあまり変わらないんだな。などと物思いに耽る。
謂わば、現実逃避。
そして、現実とは簡単に逃避出来ないモノで・・・・。

「なぁ、編入生さんよ。朝からお盛んだねぇ。」

「・・・・。」

「ちょっと！反応ぐらいしなさいよ。」

「あぁ、シェス。おはよう。今日も良い・・・朝だな。」
声を幾分低くし、男のような声色で話かける。しかし、玲斗は遠い目をしたまま振り向きもしない。
やっと反応を返したかと思うと、ずれまくった内容だ。
「あんた、大丈夫？何か、朝から元気ないわよ！」
「頼む・・・朝一からウェルムを開放せず、シェスが連れてきてやってくれ・・・。」
「いや。」
「即答！？なんで！なんでだよ！」
自分のお願いに対して、恐るべき速度で拒否された玲斗は、うがー！と吼えながら理由を問いただす！
「だって、面白いじゃない。」
「あぁ、ほんと、この世界の人、ダメな人ばっかりだ・・・」
面白いから。と、至極当たり前だと言わんばかりの表情で答えるシェス。
あぁ、ダメだ！お先真っ暗だ！などと呻いている玲斗。
「冗談よ。でも、ウェルムも一生懸命なんだから、少しくらい認めてあげれば？」

「あれは、認めたらエスカレートするタイプだ。」

そんな会話をしている間も、右斜め後方にいるウェルムからの視線を感じる。

もう、笑うしかないな。ハハハ　と、乾いた笑いを上げる玲斗。

しかも、その視線だけでなく、終始、他の男子生徒から熱烈な視線を送られ続けている。

シェスも、非常に整った顔立ちをしており、サバサバとした性格は、男女共に人気がある。

バーツに聞いた話だが、シェスファンクラブなんてものもあるらしい。ファンクラブとは言わず、親衛隊と言っていたが、内容を聞くからにファンクラブのソレだった為、玲斗はシェスクラブと呼んでいる。

他の生徒から見れば、何処かから編入して来た男は、彼女が後を追って着いてきているのに、魔法課のアイドルと仲良さ気にしている不届きな奴だ！と言う事になっているらしい。

カーン　カーン

玲斗が盛大にため息を吐きながら、頭を抱えていたら、始業の鐘の音が聞こえる。

一日の始まりだ。

ガラガラ　と、横開きの入り口の戸が開かれ、筋骨隆々な男性が入ってくる。ジェリオットだ。

「おはよう！みんな、席つけよー！」

ガヤガヤと会話を楽しんでいた面々は、ジェリオットの声に素直に

従い、自らの席に着いていく。
彼は、その持ち前の明るさと、裏表のない性格から、非常に生徒に好かれている。若干、友達みたいな空気が漂ってはいるが、問題になる程ではなかった。

「よーし！いないものは手をあげろー！」

失笑も生まれなかった。
玲斗に関しては、ずっと頭を抱えたままジェリオットが来ている事にも気付いていないようだ。

「ごほん！それじゃー出席とるぞー！」

順々に生徒の名前を呼んでいく。魔法がありふれた世界でも、朝の学校の風景は一緒であった。

こうして、忙しなく朝の時間は過ぎて行くのだった。

第1章～アスベール学院～　プロローグ（後書き）

どうも！！みなさんの紅丸です！！
あ、お呼びでない・・・？
こりゃまた、失礼。

おかげさまで、この　星屑の使徒　も、第1章に突入です。
え・・・？第0章長すぎるって？
もう、謝るしかないね。ゴメンナサイ　ｏｒｚドゲザ

そして、記念すべき第1章突入の上に、とうとうユニークアクセス数が１０００件突破致しました！
有り難うございます！
飽きずにご指示、ご支援頂ければと思います！
どうか、清き一票を！！（何の選挙かと）

第1話　魔法概論と魔法実習

―魔法概論―

「・・・と、言うわけだが・・・。まぁ、この辺は今までの学年の復習だな。ちゃんと着いて来てるかぁ？」

早口に魔法についての基礎を並べ立てて説明するジェリオット。復習と言われても・・・と、玲斗は必死になりながらノートに書き留める。

（あっちの学校でも、こんな真面目にノートとってなかったぞ・・・。）

知らない世界の常識は、玲斗にとっては非常識である。その為、必死に成らざるを得ない。
意外に真面目そうにノートにペンを走らせる玲斗にシェスは、意外だわと失礼千万な感想を抱きながら、小さな紙に小さく文字を書き込む。
それを更に小さく折りたたむ。そして、玲斗の机に向かって放り投げた。

～後で教えてあげるから。～

シェスやバーツは、玲斗が異世界からやって来ている事を知っている。シェスも失礼な感想を抱きこそすれ、事情を知らない間柄ではない為、玲斗の必死さの理由も解る。
玲斗は、返事を書こうとして手を止めた。

（礼を書こうにも、字が・・・うがー！不便だ！！）

一週間近く講義を受けているが、文字を読む事に関しては問題ない為、まだ字を会得していなかった。
まずは、そこから教えてもらわないとな・・・と、憂鬱なため息をつく玲斗だった。

「――――ってわけよ。わかる？」

「あぁ。なんとなく。」

午前中の講義が終わり、昼休憩。いつもの食堂で、玲斗とシェスはノートを引っ張り出し、睨めっこしていた。
説明の難しい内容の時には、時折バーツも説明も挟む。

「一般的に多いとされるのが、火・風・水・木・地の５つなの。」

「それぞれ、相対関係があるから、コレも覚えないといけないね。」

それぞれ、相対関係があり、
地は風に強く、風は水に強く、水は火に強く、火は木に強く、木は地に強い。と、バーツが説明する。

「まぁ、属性的な相対関係だから、魔力の差が大きすぎる場合は、これに当てはまらないね。」

５歳の普通の子が使った火の魔法では、熟達した木の魔法には勝てないと言う事らしいが、地を使うよりはマシかなくらいの程度だと

バーツは続ける。

「それに加えて、派生3属性があるんだ。」

派生とは、5大属性から派生した属性の事を言う。雷は風から、金は地から。そして、玲斗の星属性は、光からの派生などだと言う。一般的には、派生した属性の方が、より強力であるらしい。

「星属性の人なんて言うのは見た事もないけどね。」

シェスは、笑いながら説明に付け加えた。それだけ特異な性質なのだと言う。

「あとは、生と死と闇の属性があるんだけど、コレはコレで特殊なの。」

生は、生きとし生ける者全てに備わっている。力としては発現し難い。

死は、人間には備わらない属性で、モンスターの一部に、この属性を持つものがいる。アンデッドと呼ばれる種族が持つ属性だ。

光は、これまた珍しい属性であるが、バーツの髪にも出ている通り全くいないと言う程ではなく、主に強い癒しの力を持っている。

ふと、玲斗は疑問に感じる事があった。

「じゃあ、俺の星属性は、光からの派生だから、基本的には癒しの力なのか？」

「そうとも言えないんだ。」

と、バーツは否を唱える。

「雷の力は風からの派生だけど、風には癒しの力があって、雷にはないんだ。」

「地の属性にある守りの力も、金属性では使えないわね。」

結局のところ、遣ってみなくちゃ解らないと言うのが二人の見解だった。

「大体把握したよ。有り難う、二人とも。」

そんな風景が繰り広げていたが、実は玲斗のすぐ隣にはウェルムが鎮座している。

ではなぜ、彼女は説明に参加しないのか。

なぜならウェルムは、ひたすら昼食を平らげていたからだ。

かれこれ１０人前・・・。食堂に関しては課は関係ない。白い制服、黒い制服、群青色の制服。その為、あの子は誰だろう？と言うか、あの子は何者だろう？と、周りからも、奇異の目で見られている。

これも、一種の名物になりつつある光景であった。

小さいウェルムの体にどれだけの食物が吸収されているのか、見ていて恐ろしい限りだ。

「で、ウェルム。どんだけ食べるんだ？」

「ふぁい、いふぁほほほろ、ふぉふぁりへいほはほ。」

「よし。全然わからん。ちゃんと飲み込んでからで良いから。」

口の中一杯に食べ物を詰め込んだウェルムが、上手く口から一欠け

らも落とさずにモゴモゴと喋る。
飲み込めと言われたウェルムは、少しの間咀嚼した後、ゴクっと音を立てて飲み込む。

「はい、今のところ、5割程度かと。」

「切実に思うよ。この食堂が無料でよかったと。」

遣り取りを見ていた二人も、苦笑いを浮かべながらウェルムを見つめている。
この異常な食欲にも驚かされるが、それ以上に驚くべき事は、授業中のウェルムの学力や技術だった。
こと、魔法と言うものは、経験と言うものに大きく左右されるモノである。
当然、才能や、努力も関わってくるが、一度経験すると言う事が、魔法においては特効薬となるのだ。
しかし、十数年程しか生きてこの幼く見える少女、ウェルムは、全ての教科において驚くべき能力を発揮していた。
同年代としても見れないような、この小さな少女は、魔法をあたかも手足のように操る。教官でなければ出来ないような呪文を唱え、難しい魔法薬の知識に長け、知識においては学者のそれと等しい程だった。

「それにしても、ウェルム？」

「はい？」

ボケーっとウェルムを見ていたシェスが、何かに気付いたように話掛ける。

「ウェルムの力で玲斗を元の世界に戻せないの？」
事情を聞いているシェスは、この一見、１２、３歳の少女が、普通の存在でない事を知っている。
だからこそ、確認の意味を込めて問わずにはいられなかった。
「それは・・・。無理です。聞いているかと思いますが、元の世界の玲斗さんの肉体は死を迎えております。精神だけがこちらへと渡り、我々の用意した肉体に収められております。」
「そう・・・よね。どうにもならないもんなの？」
「向こうの輪廻の輪からは外れてしまっているので、こちらで死んでも、こちらで転生する事になります。」
「死んだら意味ないしなぁ。」
遣り取りを聞いていた玲斗が口を挟む。幾分明るい声で笑い、ふざけた態度ではあったものの、目だけは寂しげな色をしていた。

―魔法実習―

玲斗にとっては、鬼門となるのが魔法実習と言う科目だ。
今まで魔法の無い世界で生きてきた玲斗にとって、魔法を実際に使う為の経験が著しく不足している。
他の生徒はと言うと、自分の属性の魔法の基礎は最低でも使用する事が出来る。
火属性なら、火の玉を生成するファイアボール。水属性なら、無数

のシャボン玉を浮遊させるバブル。地属性なら、地面から壁を出現させるグラウンドウォール。風属性なら、小さな竜巻で自分を包むウィンドカーテン。
一度使用出来てしまえば、次回発動からは感覚で発現させる事が出来る。
この世界の人々は子供の頃から、ある程度の訓練を行う。玲斗の世界で言うところの、自転車のようなものだ。
見よう見まねで、親や周りの人が使用した魔法に挑戦する。
しかし、ここで玲斗の頭を悩ませているのが、自分と同じ属性・加護の人間が皆無と言う事だった。
これぱっかりは、シェスやバーツにも、どうする事も出来ない。
ここで、ウェルムの登場だ。

「とうりゃ！」

「違います。レイト。それでは・・・あぁ・・・。」

「ふんが！」

「力を入れてどうなると言うものではありません。」

「わっかんねぇよ！」

玲斗も加速の魔法は使える。が、しかし、魔法のあまりに希少な性質上、やたらと遣う事も出来ない。
星の加護の元行使される物理法則の無視など、他の生徒は見た事もない魔法である。
ココで、これ以上に奇異な性質を持つ玲斗の噂を立てる訳にはいかないのである。
ウェルム曰く、超加速は、中でも困難な部類の魔法になるらしい。

しかも、無言（むげん）での発動など、他の生徒には見せられない。

「世界の理（ことわり）に縛られてはダメです。自分が世界だと思って下さい。」

「んなこと言っても、それってかなり難しいぞ・・・。」

無茶な事を言うなと、額に汗しながら文句を言いながらも必死に魔法を使おうとしている。

そもそも、元の世界では魔法と言う概念が無かったのは、人間そのものに「魔力」が無かったからだと言う。

玲斗は、精神体となってこの世界にやってきて、ウェルム達の用意した肉体に入れられている。

こちらの世界の人々には、多かれ少なかれ魔力がある。その肉体をベースに構築された玲斗の体にも、魔力は存在した。

使えないハズはない。と言われて、使えるようになれるわけではないのだが。

今、玲斗達が使おうとしている魔法は、世界の理を曲げ空間を圧縮した「玉」を発現するものだ。

超加速のように、自分の周り半径１m程度の空間を加速させるような大出力のモノではなく、掌の上に収まる程度の空間の理を歪めると言うものだ。

「玲斗の使った超加速。これをアクセレートと言います。これはコンプレッションと言います。言の葉を紡いだ方が簡単だと思いますよ？」

「そう言うもんなのか？そう言や、みんな何か言ってるなぁ。」

「発現の為の言葉と、魔法名を言うだけでも、大分違います。」

基本的には、魔法は言の葉を紡ぐ事で神経の集中のイメージの具現化を行う。そして、魔法名を唱える事でそれを発現させるものだ。無言での発動は、熟達した者の使うものだと説明する。
玲斗は、最初イメージ部分を無言で行い、「動きたい！」と魔法名とは言えない言葉で発動させていた。
その為、「うりゃ！」や、「とう！」などと言いながらもがいていたのだ。

「なんか照れくさいな・・・。手本見せてくれよ。」

「私のこの体の属性は闇です。おそらく、感覚的には似てるのではないでしょうか。やってみます。」

そう言いながら、掌を上に向けてまっすぐ前に伸ばすウェルム。

『光を閉ざし闇とする』

ウェルムの掌の上に黒い靄のようなモノが現れる。

『闇夜よ包め彼の者を』

黒い靄が手の平の上で球体へと変化していく。

『ブラインド』

手の平の上から放たれた黒い球体が、離れた場所で生徒に指導していたジェリオットの方へと飛んで行く。
飛んでいった球体は、ジェリオットの頭の辺りで弾けると、黒い靄がジェリオットの頭に纏わりついた。

「うわっ！なんだこれ！！」

急に魔法を掛けられたジェリオットの悲鳴が聞こえる。

「ま、前が見えない！！」

纏わり着いた黒い靄がジェリオットの視界を奪っているらしい。
指導を受けていた生徒も、何の事だか解らず小さく悲鳴を上げながらジェリオットと距離をとる。
あちらへフラフラ、こちらへフラフラと歩きながら彷徨うジェリオット。
そして、前にある練習用の案山子に激突すると、「うべはっ！」と良く解らない悲鳴を上げて倒れてしまった。

「おい、ウェルム。先生を実験台に使うなよ・・・。」

「レイトに使ったら意味がないので。それに生き物対象じゃなければこの魔法は使えません。」

「にしてもだなぁ。。。まぁ、後で謝っておこう。」

玲斗が苦笑いをしながら、頭を掻く。
離れたところで練習していたシェスとバーツも、原因に気付いてこちらへと苦笑いを浮かべていた。

第1話　魔法概論と魔法実習（後書き）

お久しぶりです！紅丸です！
かれこれ、更新日数が開いてしまいました。
楽しみにして頂いていた皆さん、申し訳ありません。
１部に突入し、これを期にＨＰを現在作成中で御座いまして、その編集作業に追われておりました。
しかーし、本分は小説です！
手段と目的が入れ替わらないようにしなきゃですね。。。

今回は、魔法について、細かい部分の設定を玲斗が学びました。
これからもこういった形で、世界の事を少しずつ学んでいくと思います。
説明っぽい文章になってしまいがちですね。。。
拙い表現力で申し訳なさタップリです。

何はとおもあれ、コレからどんどん玲斗も成長してまいります。
長くお付き合い頂ければと思います。
宜しくです！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9430g/

星屑の使徒

2010年10月16日00時22分発行